翁物語

マクベス外二篇

（通俗世界文學第二編）

シエークスピヤの像

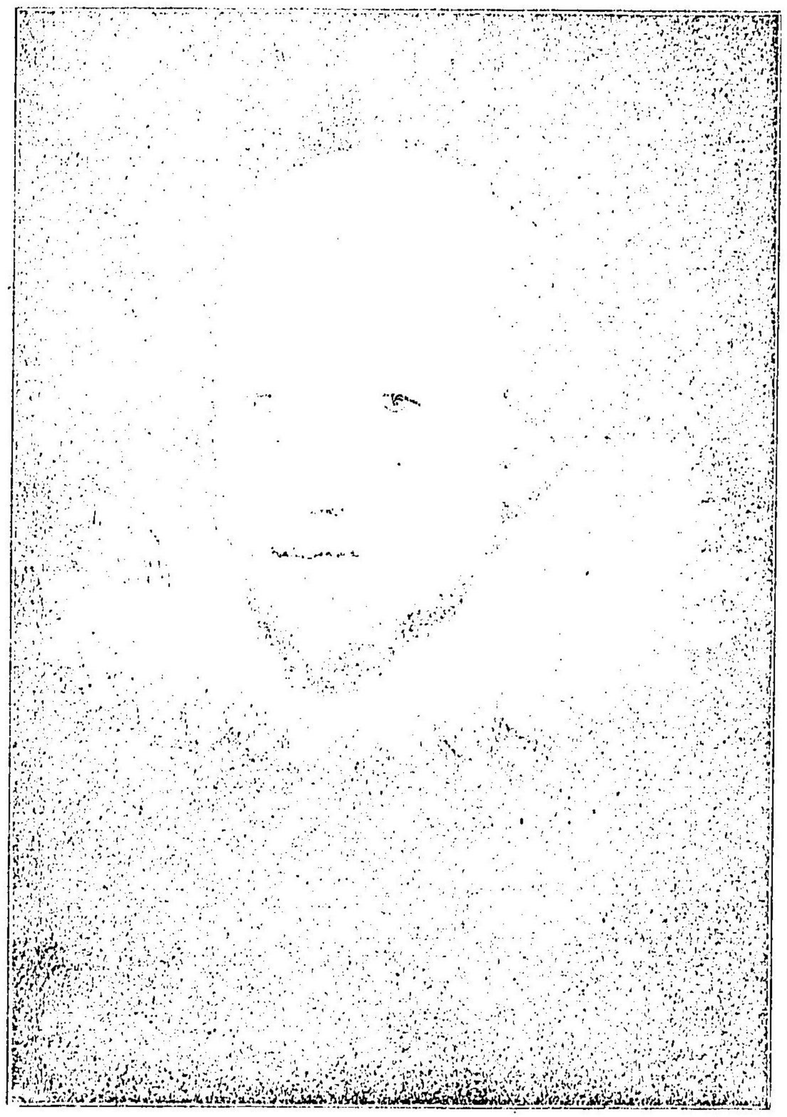
目次

マクベス……一
あらし（テムペスト）……三
第十二夜（トエルヴス、ナイト）……四

挿絵

一、沙翁肖像……ハヅフラン筆
二、あらし野……同
三、亡霊……ギルバルト筆
四、昔がたり……同
五、離れ小島……ブラウン筆
六、影の影……同
七、春……同
八、ヴイオラ……レイトン筆

◎挿絵につきて……



シエークスピヤの像

目次

マクベス……上
あらし……同
ハムレット
第十二夜……高
（エルヴィスナイト）

挿絵

一、松管官能
二、野
三、亡霊
四、門番がたり
五、魔女小島
六、ダンカン王
七、悲しみの影
八、王冠
九、ヘンリー王

（挿絵につきて……）

41-109

坪内文學博士閲
杉谷代水編

（一）

英吉利國の北部蘇格蘭の聯邦を統治するダンカン王の親族にマクベスといふ重臣があつた。數度の戰爭に勇敢無双の名を攝かして、王の覺えもいとめでたかつたが、今しも國内に叛亂が

起つて、那威の大王自ら將として之れを援け、ゆゝしき大事に及んだので、マクベスは又も命を受けて、同族の一人バンクォーと共に鎭撫の軍に赴いた。敵は慓悍なる北國勢、而も目に餘る大軍ゆゑ、味方の軍甚だ難儀と見えたが、マクベスが身を挺して敵陣に躍り入り、縱横無盡に斫り回つて、遂に敵王を打ち取つたので、勝利は難なく味方に歸し、賊魁コードル侯を生捕りて目出度凱歌を揚ぐることゝなつた。ダンカン王の本陣へは、早打の使士兩三人一伍一什を注進に及んだので、今に始めぬマクベスが勇武絶倫の働きと王の御感は斜めならず、取あへずマクベスをコードル侯に封ずべしといふ使を戰場まで差立てられた。

さてもマクベス、バンクォーの兩將は、駒を駢べて王城に歸る

路すがら、日も早や西に入相時、とある曠野にさしかゝると、行く手の方に怪しき三人の婦人、髪長く身の皮皺みて鬚あり、人間にあるべしとも思はれぬ異樣の姿して、殊更に道を塞ぐ樣子の、いかさま仔細ありげに見えたので、マクベスが先づ『何物』と咎むれば、それには答へず、

甲『千代ませ、グラミス侯。』

乙『千代ませ、コードル侯。』

丙『千代ませ、マクベス、八千代ませ、未來の國王。』

と聲々にマクベスを祝した。さても不思議、マクベスは現にグラミス侯であるが、コードル侯に進んで、遂に國王の位に登るべしとは何事ぞ、王には歴とした王子さへあるものをと、マクベスは打ち愕いて霎時言葉も無かつた。

三人の妖婆は更らにバンクォーに向ひ、

甲『千代ませ〳〵。』

乙『マクベス殿より劣れど勝る幸ある殿。』

丙『國王とこそなりたまはね、國王あまた生みたまはん殿。』

と祝して、また二人に向ひ、

甲『されば祝へや二方を。』

乙『祝へやマクベスを。』

丙『祝へやバンクォーを。』

甲、乙、丙『千代ませ、千代ませ、八千代ませ。』

と言ひ置いたまゝ、婆は虚空に消えて了つた。

二人は不審の思をなして、直ぐにも得去らず暫く佇んで居ると、彼方より汗馬に鞭打つて驀らに驅けて來た二人の騎士、

マクベス、バンクォーを見るや、ヒラリと馬を下りて會釋をなし、『此の度の戰功拔群の次第、國王聞こしめされて御喜び斜ならず、取りあへず當座の感賞としてマクベス殿へコードル侯の封を授くべしとの御上意でござりまする。』と正しく妖婆が預言の通りであつた。

今更ら驚く兩大將、中にもマクベスが心の動亂は名狀し難い。さては變化の言葉にも據ありしか、コードル侯は既に得たり、次に來るべきは國王の位！あなかしこ〳〵、と胸中こゝに大望の萠を生じたのである。

マクベスはバンクォーに向ひ、『變化の言葉の斯くまで確かに當りしを見れば、御邊の子孫は上なき立身なるが、何とさは覺さぬか。』と氣を引いて見るに、バンクォーは、『何の〳〵、總じ

で變化惡魔と申す者は、些、少の事に驗を見せて、人を邪道に導くとの事。兎角用心が肝要でござる。』と平然たる挨拶である。併しマクベスの心は疾くに邪道に陷つて居たので、バンクォーの正常なる言葉に耳を開かず、ひたすら蘇格蘭の王座をのみ眼中に映じてゐたのは、淺ましき次第であつた。

さてマクベスには多年連れ添うてゐる異躰同心の夫人があつたゆゑ、途中で手紙を認めて、事のあらましを知らせておいた。すると此の夫人は、良人にも劣らぬ大望の女であつたので、大きに歡び、マクベスが望を遂ぐるまでは自らその刺激となつて、如何なる怖ろしき手段を取らすことをも辭せざる覺悟を固めてゐた。――場合によつては國王の御衣を血に染むる程のことをも！

斯るところに、これが世に謂ふ運の盡き目か、國王は折々身を降して功臣の邸へ成らせらるゝ例によつて、這度も取りあへずマクベスが居城へ鳳輦を向けられ、彼れが嚇々たる戰功に、一段の光榮を添へんとの有難き御諚があつた。

マクベスの居城は、王宮より若干の距離にあつて、大樹小樹の青葉深く、折しも春の末つかたとて、燕の舞、雲雀の囀、いとも長閑にすが〳〵しき景色であつた。王はマルコム、ドナルベーンの二王子並びに數多の近侍と共に此の景色を賞玩あり、主人夫婦が至らぬ方なき饗應に、心も晴れて一日を遊び暮された。何ぞ知らん、此の美景の中に隱々たる殺氣あり、マクベス夫人が花の如き笑ひの底に、蝮蛇の齒よりも怖ろしき毒刄の藏れてゐやうとは。

かくて王は相應に疲勞し、其の夜は居城の一室にて早くより御床に就かせられ、近侍の士二人がお次ぎの室に寢むことになつた。勿論主人の款待にはこよなき滿足で、マクベス夫人へ貴き金剛石のかつげ物まであつての事である。

既にして、萬象悉く靜まり、山野にたゞ狼狽の盜歩する眞夜中頃、マクベス夫人は密かに臥床から起きて出た。今が世に謂ふ優曇華の花、良人マクベス殿へは晝間とくと決心をつけては置いたれど、日頃の氣質、果して大事を行ひたまふや否や覺束なし、よし〳〵覺悟はこゝなりと、夫人はそのまゝ身拵へして、片手に短刀を拔き持ち、ぬき足さし足、王の寢室へ忍び入つたのである。王はその身の危險を夢にも知らず、たゞすやすやと眠られ、近侍の二人も十分に盛りつぶされた事とて、

前後も知らず熟睡して居た。夫人は短刀の欄をしつかと握つて王の側にさし寄つた。が、此の途端、何となく王の顏が自分の父に似てゐる樣に思はれたので、到頭刄を下すことが出來なかつた。

この上は矢張り良人の手を假るより外は無いと、夫人は引つ返してマクベスを尋ねた。マクベスは今日一度決心はしたものゝ、愈々手を下す時に迫つて忽ち良心の激しい責めに遭つたのである。第一、ダンカン王は主君にして且つ近き親族である、又今日其身は接待の主人なれば、命に代へても王を保護すべき義務こそあれ、双の向けられる道理は無い。況んや王は寛仁大度の德高く、臣下は皆悅服し、現にこの身も王の厚遇によつて斯くは拔群の榮を受けてゐるでは無いか。……

『然うぢや、今まで磨きし尊き名譽を、何とて弑逆の血を以て汚されよう。』……

マクベスが斯く自ら責めて、大事を思ひ止らんとしてゐる體を見るや、夫人はいらだち、こは言ひがひ無し、日頃にも似合はぬ未練の振舞、と先づ辱しめ、善惡利害は兎まれ角まれ、武夫の一旦斯うと極めし事に、躊躇して得進まぬは臆病の至りといふ事、今宵の大事は危むに足らず、一擧手の働きにて束の間に易々と仕遂げらるゝ事、今一時の勇氣にて夫婦が百年の榮華は得らるゝ事などを疊みかけて說き立て、『妾とても女なれば、乳房に縋る嬰兒の可愛さいとしさは知つて居れど、されども、一旦斯うと誓うた上は、其の嬰兒を我が懷よりもぎ離して、頭も微塵に打ちつくる程の覺悟はあるに、去りとては言ひ甲斐無い。』と辱しめ勵まし、到頭良人を說き伏せた。

(三)

マクベスは遂に意を決して、用意の一刀を受け取つた。これは近侍の佩刀で、遂行の後、罪を彼れ等に負はせん爲めに夫人の奪ひ置いた品であつた。マクベスは此の刄を握つて闇中を進んで行くと、忽ち眼前の虛空に一口の短刀が現はれた。——鋒尖は彼方に、柄は此方に、手を擧げて掴まんとすれば實體無く、目にはありく〳〵と物凄き光を放つて腥き血汐に染まり、一歩又一歩恰も彼れが兇行の嚮導を爲すものゝ如く、——これは彼れが心の幻覺でつた。

マクベスはそのまゝ王の寢室に入り込んだ。

つか〳〵と寢床に近づき、猶豫も無く彼の短刀を以て只一刀に王を刺した。

マクベスが兇行を遂げて刄を引いた途端、次の室に寢て居た近侍は、夢ともつかず現ともつかず、一人がから〳〵と笑へば、一人は『人殺し』と叫んだ。互の聲に驚いて二人は鳥渡目を覺ましたが、寢惚けたまゝ一人が『南無阿彌陀佛』と言ふと、一人も『南無……』と言つて、そのまゝ又寢入つて了うた。後には何の聲も無い。マクベスは彼れの『南無』と言ふに和して、已れも『南無』と言はうとしたが、聲が喉に塞つて、どうしても出なかつた。

暫くすると何處とも無しに『もはや安眠無し、マクベス眠を殺したり、生命を養ふ罪無き安眠を殺したり。』と呼ぶ聲がし

て、又引き續き、『もはや安眠無し、安眠無し。』と段々に聲が高くなつて、『グラミス眠を殺したり、コードルには安眠無けん、マクベスには安眠無けん。』と呼ぶ聲が屋内に鳴り渡つた。

斯る恐ろしき幻想に迷はされつゝ、マクベスは血刀提げて夫人の居る處へ歸つて行つた。夫人は始終息を殺して物音に氣を注けて居たが、今しも良人の眼差から息遣ひ足の踏み、樣まで尋常で無いのを見て、或は大事を爲損じたのではないかと思つた。が樣子を聞いて安堵し、直樣良人を勵まして、先づ朱に染つた其の手を洗はせ、自心は彼の血刀を受け取つて、大膽にも死せる王の居間に取つて返し、次の間の近侍二人に罪跡の血汐を塗り附けて置いたのである。

兎角する中に怖ろしい一夜は過ぎた。明くれば隱れもな

い國王が慘死の姿！城中は上を下への大騒亂。マクベス夫婦は巧みに驚愕悲歎の狀を演じて居た。さて二人の近侍が血刀を持ち血汐を浴びてうち仆れてゐるところは、いか樣弑逆の下手人たる證據明白とは見えたが、尙ほ彼れ等風情にして斯る大それた事を仕出さん理由も無いのであるから、これには誰れか教唆者のあるべき筈、さしづめ此の家の主人マクベスこそと、衆目の疑ひは密かにマクベスに注いだのである。そこで二人の王子は、逸早くその身の難を避けて逃亡した。――兄宮マルコムは英蘭に走つて彼處の王に助けを求め、弟の宮ドナルベインはエールスの朝に身を投じたのである。

（三）

是に於いて弑逆の教唆は、二王子であつたといふことになり、國王の空位を充さんが爲め、近族の一人としてマクベスが推されて位に即いた。即ち大望成就して一段落を告げたのである。併しマクベス夫婦は、尙ほこれで安心する事が出來なかつた。グラミス侯よりコードル侯、コードル侯より蘇格蘭の國王と、妖婆が豫言の適中は今更ら驚くばかりであるが、それにつけても忌はしきはバンクォーに對する豫言で、夫婦がさしもの大罪を犯してまで奪ひ取つた王位を、已れの子等ならぬバンクォーの一族に讓らねばならぬ樣では、その口惜さ本意なさは如何ばかりであらう。そこで二人は又相談して、第二の非常手段を行ひ、バンクォー父子を滅ぼして妖婆が預言の根を斷たうと決したのである。

即ち王宮に於いて盛んなる夜會を催し、王族諸大臣殘らずを招待した。バンクォー及び一子フリアンスは言ふまでもなく筆頭として招かれたのである。斯く計らひ置いて、マクベスは、窃かに數人の刺客を路に伏せ、バンクォー父子を要擊させた。そこでバンクォーは非業の刄に落命したが、その子フリアンスは危く免れて出奔した。後年果して蘇格蘭の王位に登り、その子孫相嗣いで遂に英蘇合同帝國の建設を見るに至つたのは、このフリアンスの事である。

閑話休題、新王マクベスの宮中には來賓既に席に滿ち、或はマクベス陛下が英武絶倫の德を稱へ、或は王后陛下の賢明艶美を贊してゐる。マクベス夫人即ち王后には華車の姿に尊貴の盛裝を凝らし、漏れ無く衆賓の間を斡旋してゐる有樣た

小川一眞製版印刷

『…十有二年夢のまに過せば過ぐる月日とあつた』

（第一幕第三場　マクベスの城）

即ち王宮に於いて盛んなる夜會を催し、王族諸大臣殘らずを招待した。バンクー及び一子フリアンスは言ふまでもなく筆頭として招かれたのである。斯く計らひ置いて、マクベスは、窃かに數人の刺客を路に伏せ、バンクォー父子を要擊させた。そこでバンクォーは非業の刃に落命したが、その子フリアンスは危く免れて出奔した。後年果して蘇格蘭の王位に登り、その子孫相嗣いで遂に英蘇合同帝國の建設を見るに至つたのは、このフリアンスの事である。

閑話休題、新王マクベスの宮中には來賓既に席に滿ち、或はマクベス陛下が英武絶倫の德を稱へ、或は王后陛下の賢明艶美を賛してゐる。マクベス夫人即ち王后には華車の姿に尊貴の盛裝を凝らし、漏れ無く衆賓の間を斡旋してゐる有樣た

小川一眞製版印刷

『…十有二年夢のまに過ぎぬる月日とあつたら』
（筆トルバルギンヨリ、アサ、一『しらあ』）

〻〳〵凄艶と稱ふべきである。マクベス王には威儀風采四邊を拂つて、言語朗々と滿場に挨拶し、『今宵の宴に蘇國の寶ともいふべき一代の名士の盡く集られしこと、寡人が滿足の至りである。たゞ遺憾なるは、身が最も敬愛するバンクォー殿の親子の見えられぬことぢやが、これとても不慮の變事と聞いて歎かんより、會を失念せしと聞いて咎むる方をば望み申すのぢや。』と飽くまで甘言を以て衆心を籠絡した。さて座に復らんと振り向く刹那、こは如何に、まざ〳〵とバンクォーの亡靈、王の玉座を占めて、怨みの眼に此方を睨んで居た。マクベスは萬夫不當の猛將ではあるが心の責めには堪へられず、見る〳〵面色灰と變つて、彼方を見詰めたまゝ物をも言はず震ひ戰いた。しかし、亡靈の姿は夫人には見えなかつた。固よ

り衆賓に見えやう筈も無い。たゞ王が座に復らず慄へて居るは、何か遽かの病氣と思つてゐた　夫人は良人の側に驅け寄り、耳に口附けて、『お心慥かに遊ばせ、何かの妄像でござります、彼の時の短刀と同じことでございます程に、必ずお氣を弱くなされますな。』と諫め勵ましたが、マクベスは耳にも入れず、依然亡靈の姿を見詰めて、はては一言二言問答を始めた。夫人は氣が氣で無い。うち棄ておかば大事の露見、身の破滅と、早速の氣轉に一座に向ひ、陛下には急病の御樣子ゆゑ折角なれど今宵の宴は是れまでと、直ちに夜會を解散した。

(四)

マクベス夫妻は大逆無道の刄を用ひて、一度王位は奪つたものゝ、程經るまゝに絶えず心の苛責を受け、眠れば必ず惡夢に覺まされた。加之バンクォーが亡靈の怖ろしさにも增して恐るべきは、逃亡せる一子フリアンスで、彼れこそは已が王位を奪ひ取るべき定運を握つてゐるのである。マクベスは斯く現在未來の不安に得堪へず、この上の運命を質さんものと、彼の妖婆を再び曠野に訪れた。

妖婆はもとより變化の者、マクベスの來らんことを豫知して、おのが巖窟に準備を整へて彼れを待つた。先づ冥府の亡者を祈り寄すべき犧牲として、蟾蜍、蝙蝠、蝮蛇、蠑螈の眼、狗の舌、蜥蜴の肢、梟の羽根、火龍の鱗、狼の齒、鱶の浮囊、巫女の木乃伊、闇夜に堀つた毒草、失鳩答の根、山羊の膽、猶太人の肝臓、墓塲に生じた水松の枝及び死せる嬰兒の指なんといふ怖ろしき品々

を集め、之れを大きな鼎に入れて沸々と煮る鼎の下の火には人殺の絞臺の材から採つた脂を燃し、熱くなり過ぎれば、狒々の血を注いで之れを冷し、それに已が兒を食つた牝豚の血をかけて亡者の供物となし、呪文を唱へて冥府の亡靈を招き、問答を行ふのである。

さる程に、マクベスは妖婆の岩窟を訪れて來意を告げると、妖婆は彼れを祭壇の邊りに導き、マクベスの問に對しては妖婆の取次いで答ふべきか、又は直ちに冥府の靈をして答へしむべきかをマクベスに諮つた。マクベスは覺悟の上なれば、毫も恐れず、直ちに精靈に接せんことを求めた。妖婆は即諾、やをら祈り出したのは三人の精靈である。

第一の精靈は兜の樣なものを被つてゐたが、マクベスに向

つて、ファイフの城主を警戒せよと告げた。是れに向つて、マクベスは其の好意を謝した。蓋しファイフの城主といふのは、相應に武功もあつたダンカン王の舊臣マクダッフの事で、内心マクベスを疑ひ且つ憎んでゐるのは、よく知れてゐたからである。

第二の精靈は、血に塗れた童形であつた。マクベスの名を呼びつゝ姿を現はし、『恐るゝ勿れ、心を劍とせよ、人の力を嘲み笑へ、女の生みたる子は決して爾を害する能はじ。』と告げた。マクベスは大いに心を安んじ、『此の上は、我れいかでマクダッフ如きを恐れんや。』と高らかに呼はつた。

第二の精靈が消ゆると共に、立ち現はれた第三の精靈は同じく童形で、王の冠を戴き、手に青葉の茂れる枝を持つてゐた。

前の如くマクベスの名を呼び、『恐るゝな叛逆を。バアナムの森、ダンシ子ンの岡に向つて進み來らざらん限りは、爾が身は安全なるべし。』と告げた。マクベスは歡天喜地、『あら嬉しや、誰れか森林を拔いて岡の上に徙し得るものあらんや。此の上は我が天命は堅固なり。』と喜び叫んだ。

さるにても尙今一つ心がゝりの事こそあれとて、マクベスは妖婦らの方に向ひ、『尙改めて尋ねたし、誰ぞ語り聞かせよ。バンクォーが子孫果して蘇國の王位を踐むべきか、如何に〳〵。』と呼はる其の聲の未だ消えざるうちに、忽ち殷々たる樂聲洞中に響いて、例の鼎は地中に沒し、それに立ち替りて朦々朧々として現はれたものがある、それは都合八人國王の姿をした精靈であつた。皆影の如く空中に浮んで、一人々々マクベス

の前を通つて彼方へと消え行く。よく見れば最後の一人は正しくバンクォーで、弓手に一面の鏡をさゝげ、マクベスの顏を見て嘲み笑ひつゝ馬手を擧げて鏡中の影を指し示した。映つて居るのはバンクォーそつくりの王者の影であつた。これに由てマクベスは、バンクォーの子孫が彌々蘇格蘭の王位を繼紹すべき筈のものと覺り、茫然憮然として一行の後を見送つてゐると、樂聲再び低く起り、彼の三人の妖姿はマクベスに會釋して姿を消してしまつた。これより後、マクベスはもう半分狂憤になつて、殘忍暴厲を敢てするに至つたのである。

さてマクベスは、妖姿の窟から城中に歸つたが、その第一に耳にした報知は、彼のファイフの城主マクダッフが英蘭に出奔して王子マルコムに合し、彼れを擁立して義軍を擧げ、蘇格蘭へ

押寄せんとの謀を回らしてゐるといふことであつた。マクベスは切齒をなして怒り悔み且つ震慄した。そこで直ちに兵を出してマクダッフの居城を襲はせ、後に殘つた妻子眷族一人も餘さず虐殺して了つた。

目のあたり、斯る殘忍の振舞の演ぜらるゝのであるから、衆臣の心は疑懼動搖せざるを得ぬ。マクベスの廷に仕ふるは毒蛇の窟に出入すると一般で、いつ何時その嫉視を受けて、如何なる憂目に遭ふか測られぬのである。是に於て城中有爲の徒は陸續出奔して、マルコム、マクダッフの軍に投じた。義軍の勢ひは日に振つた。マクベスが追討の師は、捗々しき行進も爲し得なかつた。

今や城中マクベスの爲めに一死を擲つの覺悟ある者は、數

へる程も無い。殘るは大方無爲無能の懦弱の廷臣ばかりであるが、是れとても王の疑を恐れて戰々兢々として進退するのみで、內心王を忌んでゐるのは明らかである。マクベスは熟々と亡ダンカン王が羨しくなつた。我が手にかけしダンカン王は、今や墓塲の下に靜かに眠つて、心に苦み無く、內に憂無く、外に敵も無くして、平穩なる夢を結んでゐるのである。

荒涼寂寞四面楚歌の聲。斯るたより無き有樣の何とて女性の身に堪へられよう。マクベスの后は流石に感性の銳きだけに、心の悔恨に苦めらるゝことといと深く、さしもの夜叉心も今は甚しく搔き亂されて、良人と共に惡夢を見ること晝夜を別たず、遂に已れと玉の緒を斷つてしまつた。悶むべきはマクベス王である。もはや天涯地角已れに同心の者は一人

も無い。

（五）

マクベスは最早、人生に望みといふものが無くなつた。否、彼れは寧ろ死を欲したのである。しかし、敵勢進み來るの報益々急なるに連れて、彼れが勇敢の魂は動かざるを得なかつた。同じくは冑を負うて戰場に臨み、最期の武名を殘したいと思つた。

且つ彼れは、尙ほ幾分か精靈の言を憑にして居つた。――女の生みたる子は決して彼れの生を斷つ能はざる事、バアナムの森、ダンシチンの岡に迫るにあらずんば、彼れの運命は全かるべき事。マクベスは此の箴言と覺悟とを抱いて、泰然とし

て動かず、荒凉冬の如き居城に籠つて、マルコム等の來り圍むを待つて居た。

すると幾程も無く、斥候の一卒は色を失つて歸つて來た。報ずる所に據れば、彼れがダンシチンの丘上に立つて、彼方の動靜を視察してゐたところ、今朝しもバアナムの森林が、忽然として前進し始めたといふのである。

『默れ！』マクベスは大喝一聲した。『それしきの虛嚇に勇氣を喪なふマクベスと思ふか。今一言云つて見よ、手は見せぬぞ。』と烈しく詈つたが、彼れの心は大きに戰いて居たのである。――バアナムの森が、ダンシチンの岡に向つて進む、いで此の上はマクベスが最期の死物狂に敵の眼を覺ましくれんと、やがて物の具に身を固め、覺えの大刀を提げて城を出たので

ある。只見る雲霞の如き大軍、今やバアナムの森を出で、簇々として進み來るその勢ひ、中にも前頭の數隊は大將マルコムの下知によつて、手に〳〵綠樹の枝を折りかざし、隊を蔽うて進んでゐる。即ち敵に實數を知らせじとの軍略と見えた。

バアナムの森の動き來ると誤つたのは此の故である。精靈のマクベスに授けた預言は、マクベスの解せざる別の意味を以て實にせられたのである。マクベスが頼みの綱の一筋は正しく切れて了つた。

兎角する間に、先陣の衝突は早や始つた。マクベスの味方は彼れの威に服してはゐても、恩に感じてゐる者は一人も無く、機會さへあれば舊主の陣に投ぜんとするのみであつた。斯る言ふがひ無き部下を率ゐながらマクベスが最期の武者

振は目覺しいものであつた。彼は續く士卒も率ゐず、亂軍の中に突入して、當るを幸ひに薙ぎ立てた。彼れの前面に立つて仆れざる者は無かつた。且つ戰ひ且つ進んで遂にマクダッフの邊近くに出た。マクダッフも亦た妻子の怨敵に渡り合はんと、連りに進んで手痛く戰つてゐたのである。巖窟の精靈が特に警戒せよと告げたのは此のマクダッフゆゑ、マクベスは先づ之れを避けんとした。併しマクダッフは、見ると等しく穢し返せと追つかけて來た。マクベスは彼れが妻子を虐殺したこともあるので、尚更戰を好まなかつた。マクダッフは連りに迫つて、悪漢、盜賊、懦夫、犬畜生と口を極めて罵つた。

されどもマクベスは、彼の精靈の預言の殘れる一つを回想して、から〳〵とうち笑ひ、『無用なりマクダッフ、劍を以て我れ

を傷くるの難きは、空氣を彫り刻むよりも難し。知らずや、我れは神護の生命あり、女の生みたる子は決して我が生を斷つ能はざるを。』と嘲れは、マクダッフは驚かず、『笑止々々、邪神に欺かれて悔いざるの愚夫、汝知らずや、我れは尋常に女の腹より生まれたる者にあらず、世に珍らしき例にて母體を出でしものなるを。』

『やゝ何と。』マクベスは戰慄いた。『あな口惜しや、變化妖魔が兩義の詞に惑はされ、脆くも大事を過りしか。いで此の上は汝と戰ふ心無し。』と言ひ捨てゝ去らんとすれば、マクダッフは尙ほも追ひ詰め、

『さらば命だけは助けつかはし、彼の見せものゝ怪物同樣汝が頭に立札して、兇賊マクベスを見よや〳〵。』と、城中城外を引

き廻し、露しものとして甘心せん。』

『默れ下郎。』マクベスは猛然として取つて返した。『外國の果までも名を聽かせるマクベスが、何をめ〳〵と汝等が脚下の土を嘗めんや。』バアナムの森來りてダンシナンの丘に迫らば迫れ、マクダッフが女の胎より生れずもあれ、いで此の上は死物狂の勝負をせん。』

『何を。』と隻方烈しく劍を合せた。暫くは勝負も無く、火花を散らして鬪つたが、マクベスは武運盡きて、マクダッフの爲めに殺された。

どッと擧ぐる味方の勝鬪、逆賊誅戮、國土安穩、王家の御運は萬々歲とマルコン王子はやがて先帝の跡を嗣ぎ、蘇格蘭の民草は再び泰平の德政に浴した。（マクベス終）

あらし（テムペスト）

（一）

四面渺々として見渡す限り雲と濤との連れる大海原の離れ小島に、白髮白鬚髯の一老翁プロスペロが蕾の花の如き女ミランダとたつた二人で住んでゐた。ミランダはまだ東西も知らぬ時分に父に連れられて此の島に來たのであるゆゑ、今妙齡の少女となつても人間の顏とては父親より外には知らぬのであつた。

・棲居といふものは大きな巖窟で、二つ三つの室に分れて居る。その一つをプロスペロは自分の書齋と定め、こゝに秘卷を繙いて日夜神術を練つて居た。もと此の島には、ミュラック

小川一眞製

あらし（テムペスト）

（一）

四面渺々として、見渡す限り雲と濤との連れる大海原の離れ小島に、白髪白鬚翁の一老翁プロスペロが、蕾の花の如き女ミランダとたつた二人で住んでゐた。ミランダはまだ東西も知らぬ時分に父に連れられて此の島に來たのであるゆゑ、今妙齢の少女となつても人間の顔とては父親より外には知らぬのであつた。

・接居といふものは大きな巖窟で、二つ三つの室に分れて居る。その一つをプロスペロは自分の書齋と定め、こゝに秘卷を繙いて日夜神術を練つて居た。もと此の島には、ミュラック

小川一眞製

スといふ妖魔がゐて、己が意に從はぬ精靈を大木の中に封じ込めてゐたが、プロスペロが此の島に漂流して來た少し前に此の妖魔は亡つたので、プロスペロは直ちに神術を以て件の封を解き、精靈を救うて我が手下に使ふことゝなつた。精靈の名はエーリエルといふのであつた。

エーリエルは小さな活潑な無邪氣な精靈で、從順にプロスペロの命を守つてゐた。又別にカリバンといふ怪物があつた。これはシコラックスの遺子で、その容貌の醜怪で、人間に遠いことは猿よりも甚しい。母に離れて林の中に泣き迷うてゐたのを、プロスペロは見付けて連れ歸り、情をかけて教へ育てゝ見たが、元來母怪の惡性を享けて生れて居るので、何を習せても善い事、爲めになる事とては一つも覺えぬのみか、折々

は不埒を働く。　そこでプロスペロも懲しめの爲め、今では水を汲ませたり、薪木を運ばせたり、奴隷のやうにして使つてゐるのであるが、兎角惡い事をしてならぬゆゑ、エーリエルをして之れを監督せしむるが習ひであつた。

エーリエルは女のやうな美しい精靈なれど、不斷は姿を見せぬ、プロスペルより外には彼れを見得る者は無い。　カリバンが不埒をしたり懶けて居ると、彼れは不意に彼れを懲しめる。　時には後ろから穴の中へ衝き落したり、猿に化けて白い齒をむき出して嚇したり、又時によるとカリバンが薪を運ぶ往來に、蝟鼠になつて轉つて居たりする。　カリバンは此の獸の爲めに素足を刺されて苦んだことは何度あるか知れぬ蝟鼠を怖れること甚だしい。

プロスペロは斯る神變自在の精靈を役してゐるゆゑ、思ふまゝに風を起し濤を立たす位は容易なことである。　或日彼れはエーリエルに命じて烈しき暴風雨を起させ、蒼海の一面に荒波を擧げさせた。　もとより思ふ仔細あつての事である。恰も遙かの沖合を駛つてゐた一艘の大船は見る〳〵大濤に卷き揚げられて、今にも覆へるばかり、名狀し難き難澁におちいつた。

プロスペロは、巖窟の陰から此の有樣を心地よげに見やつてゐると、女のミランダは、此の大暴風は父の神術の所爲だと聞いて、いろ〳〵に氣を揉み、船に乘れる人間の難儀を思うて憐れがり、どうぞあの人たちを助けてやつて下されと樣々に歎く。　プロスペロは之れをなだめて、

『何も驚くことは無い。あの船は沈みはせぬ、かねて言ひつけておいたのゆゑ、船も碎けず人も死なぬ。仔細は後で解るから、その樣に心配すまい。それはさうと、今こそ我れをば父と呼んで、斯る巖窟に起臥してゐやれども、以前は何處に居たぞとも、よも覺えては居やるまい。それもその筈か、まだ三歲にも足らぬ時分。』

と云ひかけて、プロスペロは懷舊の念に堪へかねた樣子、ミランダは何氣無く、

『いえ〳〵、よう覺えて居りまする。』

と云へば、プロスペロは驚き、

『それは又如何して。その仔細を話して見やれ。』

ミランダは笑みながら、

『ほんに夢の樣であるなれど、四人五人の女たちが、始終慥か妾についてゐて。』

『おゝ、よう覺えてゐやるの。して、その外には覺えは無いか。どうしてこの島へ渡つて來たぞ。』

『もう、その外は覺えませぬ。』

プロスペロは頻りに點頭き、やゝあつて言葉を續ぎ、

『然らば、予が語り聞かせん。十二年以前には斯くいふ予はミランの領主、其方は世繼の姫であつた。然るに我れ書讀むことに心を耽らせ、政事公務が懶さに弟アントニオに萬事を任せ、常に書齋に引き籠り、讀書三昧に世を忘れたのが誤りの基、弟は腹黑き奴、次第〳〵に增長なし、遂には我れも追ひ放して、自ら領主たらんと企計し、敵國チーブルスの王をかたらひ、

我々親子を無慚にも流し者となしたりしぞ。』

ミランダは聞いて呆れ驚き、

『何故すぐに二人をば殺さうとはしませなんだか。』

『されば、ミランの府民が一方ならず我れを愛敬して居つたるゆゑ、都の中にて殺しては事面倒と思ひしなり、さてアントニオは我れを欺き船に載せ、沖合遙かに遣ぎ出でゝ親子を無躰に小舟に移し、波のまに〳〵押流せり、艫櫂も無ければ梶も無く、帆柱も無き捨小舟、命助かる望は無かりし筈の處、チープルス王の老臣にゴンザローといふ義俠の士あつて、我れを憐み人目を忍び、飲水、食物、衣類なんど、とりわけ身にも代へ難き數卷の書物を、舟の中に密かに入れおきくれたるゆゑ。』

聞けば聞くほど不思議の話、ミランダは父の顔を見詰め、

『嘸や妾がその折には、足手纏でありましたらう。』

プロスペロは女の頭を撫で、

『何の〳〵、其方はこの身の護り神であつたるぞや。波のまに〳〵漂うて、行けども〳〵水と空、艱難辛苦の數々に人を怨み世を怨み、心も狂はん折ふしも、其方が罪無き笑顔を見て、心なぐさみ氣を取り直し、幾十日を波の上、幸ひ食料の盡きぬうちに、この無人島に流れ着き、それより巖窟を棲居と定め、男手ながら其方を育て、讀み書き、物の理教ふれば、覺ゆる賢さ並々ならず、十有二年夢の間に。』

と具に語れば、父が恩愛身にしみて、暫くは涙にくれてゐたが、やがて又顔を擧げ、

『それはさうと、父樣この大暴風をお起しなされたその譯は。』

と尋ねかけるを打消し、

『そのやうな事は、今强ひて問にも及ばぬ。まあ睡やれ〳〵。』

と云ひつゝ手にした魔杖を擧げて祈念を凝せば、ミランダはそのまゝすや〳〵と眠つて了つた。折しもあれエーリエルは、大暴風の樣子を注進せんと中を翔つて歸つて來た。

プロスペロは斯くと見て、

『やあ〳〵勇ましきエーリエル、事の次第は如何に〳〵。』

問ふ間もなく、エーリエルは虛空より翔け下りて、地上に翼を歛めながら、暴風の模樣を活々と物語る。――船の大濤に弄ばるゝ樣、乘組一同の恐怖せし次第、遂にチーブルス王の王子フェルヂナントが、萬死の中に一生を試みんと、逆捲く波のたゞ中に身ををどらして眞つ先に飛び込みしこと、愛子の生命は

無きものと父王の我れを忘れてなげきしことなどを一々に物語り、

『さはあれ、王子は無事にこの島の一角に泳ぎ着き、首を俛れ手を組み、父王は溺れ死なれたらんと思ひ込みて打ち歎いて居られまする。固より髮の毛の一筋も傷かず、衣は波に濡れたれども、濡れていよ〳〵鮮かなり。』

『天晴れ〳〵。この上は、急ぎ王子を伴ひ來よ。』

アントニオとは。

『いづれもフェルヂナンド殿を搜し索めて、あちこちと彷徨ひをられまする。またその他の乘組も、一人殘さず上陸はさせましたれど、皆々別々となりましたれば、助かりしは我ればかりと皆思うて居りませう。どうぞ是れを功に、もうお暇を下

さりませ。』

ブロスペロは點頭きて

『いしくも計らひし、併も役目はまだ濟まぬぞ。』

エーリエルは失望の面色、

『何。まだ役目は濟ませぬか。それはあんまりお胴慾な。』

『やいエーリエル、大木にはさまれしを救ひ出しゝは誰れと思ふぞ。妖婆シコラックスゝ苦めゝよも忘れはすまじきに。シコラックスが非道の命に反きしとて、大木の中に封じ込められ、泣き叫び居たりしを、このブロスペロが發見なし、直樣解いて得させたる、其の恩を忘れたるか。』

當時の事を說き聞かされて、正直なるエーリエルは恐れ入り、恩知らずと言はるゝがいとつらく、頻りに詫び、

『この上は、如何なる御用でも務めませう。不埒をお免し下さりませ。』

『さもあらん。今少しの奉公ぞ。やがて自由を得さすべければ、用を務めよ。』

と言ひ渡す。

(三)

エーリエルは命を受けて、先づ王子フェルヂナンドの居所をさして翔つて行つた。フェルヂナンドは疲れた身躰を草の上に投げ出して、悄然と父上の事、乘組員の事などを考へてゐた。エーリエルはこれを見て姿を見せず、そこと無く聲を立てゝ、

『喃、若き殿よ、いざ立ちませ。我がゆく方へ來ませかし。い

ざ若き殿、いざ〳〵。』

と呼びかけて、又大空のそことも無く、

『千尋の底に父君こそゐませ。

　　み骨は　珊瑚、

　　み眼は　眞珠、

五體髮膚朽ちやらで、

　そのまゝに化したまふ。

あな奇しや珍しや、

　いざ鳴らさなん、鐘の音、

　　み吊ひの鐘の音。　ヂャン〳〵　チリリン。』

と歌ひつゝ、樂を奏して先きに立つた。

フェルヂナンドは、此の歌に父の消息を諷せられて、思はず一

足進み二足前へ出、はてはエーリエルの翔るを追うて、遂にプロスペロ親子のゐる大木の下まで來た。　ミランダ、父親より外に人間といふものを見た事無きゆゑ、此の貴公子の姿を見ると、そのまゝ只恍惚と見とれてゐた。

『やよ、ミランダ、其方は何を見詰めて居るぞ。』

プロスペロに問はれても、ミランダは尙ほ恍惚、

『父上、あれも矢張精靈でござりますかえ。　さてもまあ奇麗な精靈。』

プロスペロはうち笑ひ、

『いや〳〵。　あれは精靈では無い。　物も食ひ眠りもする、我れ等に變らぬ矢張人間。　難船仲間の若う人ぢやわい。　今は心に悲みあつて、ちと凋れてはゐるものゝ、さも無くば立派の

美男子。』

ミランダは、總べて人間といふものは、父と同じ樣にむつかしい顏をして、白い鬚を生してゐるものとばかり思うてゐたのに、今目の前に斯く若々しい美しい貴公子の姿を見て、限り無くゆかしくなつかしく思つた。

フェルヂナンドの方でも、斯る絕海の島上に圖らずも斯る美しき少女を見て、先刻からの精靈が不思議の歌を思ひ合せ、正しく此處は神仙境で、この玉の如き少女こそは女神ではあるまいかと、不審しくも思ひ、なつかしくも思つて、やがて恭々しく事の仔細を少女に尋ねた。

問はれてミランダは答へた。自らは女神などいふものにはあらず、たゞの賤の女であると答へて、尙ほ委しく素性を語

らうとしかけたが、プロスペロはこの時早くそれを遮つて了つた。――プロスペロの本心は、二人が斯く互に慕ひあふのを滿足に思つたのである。いな、二人が只一目見て戀になつたを、プロスペロは早くも見て取つたのであるが、尙ほフェルヂナンドの心底を試さんと思ひつゝ、と歩み出で、態と怒れる面色をなしてフェルヂナンドに向ひ、

『おのれ推參な小伜、この島を奪はんなどの企にて來りし間諜ならん。憎き奴、頸、手足に太繩かけて、巖屋の中に押し籠めん、海水を食ひ、生具、木の根、柳の實などに生命を繁きて、我が萬の命を奉ぜい。』

と威丈高に罵つた。フェルヂナンドは驚きながらも、血氣の若者ゆゑ、大きに激し、

『無禮なり老人、何條汝等如きの手ごめに遭はうや。』

と直に劍を拔いて向つたが、『小癪な二才。』とプロスペロが例の寃杖の一振りに、フェルヂナンドは五體動かず、『無念〳〵。』とばかり立ち竦んだ。

ミランダは氣を揉み、父の手に縋りつき、『どうぞ免して上げて下され、惡者とも思はれぬこの人を。』と止むれば、愈々聲を荒らげ、

『やい僞者の言譯をする愚者め、カリバンより外に人間を知らぬゆゑ、斯るものを又無く美しとも思はうが、彼奴がカリバンに勝りて美しき如く、彼奴に勝りて美しき者は、人間界に降る程あるは。』

と叱りたしなめて、王子に向ひ、

…せは獸な獸の想に師樂は或てめこれ垂すもれ目の春…

（第十二夜 一、ゴールドルンド、ンクラブ筆）

『…今な春べの此の庭の薔薇にも樫ひ乙女の潔白にも樫うて

何のうの僞りがりざせまりせうの…』（同上三、ゴールドルンド、クラブ筆）

『やい若者、手向ひは所詮無用ぞ。』

フェルヂナンドはとう〳〵敵しかねて、老人に隨いて行く。遽かに五體の竦んだのを魔術の爲めとも心附かねば、不審に堪へかねながらも、ミランダの方を見回り〳〵獨語、『あゝ奇怪至極ではある。夢の中で魅せられるやうに、五體は固より心までも縛られて、手ごめにさるゝ口惜しさよ。とはいへ老夫の無禮も身の苦みも、日にたゞ一度彼の美しき少女をだに見るを得ば、それにて償うて餘りあらん。』と斯う思ひ〳〵、プロスペロに隨いて巖屋の方へと行つた。

（三）

プロスペロは王子の心を試さんとて、屢々劇しい勞働を命

じた。そして自分は書齋に籠つて、二人の樣子を窺つて居た。

フェルヂナンドの命ぜられたのは、澤山の薪を運ぶことであつたが、ネープルス王の愛子ともあるものが、何とて斯る荒仕事に堪へられよう。ミランダが心配して行つて見ると、痛はしや王子は手足を擦りむき、息を切らし、堪へられぬ苦痛を忍んで働いてゐるので、ミランダは見るに忍びず驅け寄つて、

『まあ、ちよつとお息み。父上はお書齋にお籠りなれば、此の二三時間は此處へ見える氣づかひは無い。さあ〳〵暫くお息み。』

と勞はれば、フェルヂナンドは辭退し、

『何卒お構ひ下されますな。お言ひ附けの仕事の濟むまでは息んではなりませぬ。』

『そんなら、妾が代らうわいの。』

『滅相な、どうして貴女に出來ませうぞ。』

『いえ〳〵、妾が。』

いや私が、いえ妾がと互に相手を勞つて、埒も無い爭ひをしてゐるので、手傳ひどころか仕事は些も渉らぬ。

プロスペロは樣子如何にと、神術で姿を消して側に來て、この有樣を眺めて居たが、それと知らぬ二人は睦しげに、フェルヂナンドが少女の名を問へば、此方はミランダと直ぐに答へ、これは人に話してはならぬといふ父上の堅い言ひ附けなれど、と云ふ。プロスペルはほゝ笑まるゝを忍びながら尙ほ立ち聞けば、フェルヂナンドは、此の世に御身ほどいとしき少女は無い、また御身ほど美しき少女は無いと云ふ。ミランダは應へ

て、妾は女性の顔は覺えて居ず、又殿たちとて貴郎と父上とより外は知らぬゆゑ、浮世の事は暗けれど、貴郎を措いていとしい方は無い。貴郎より優しい姿は想像にも浮ばぬと云つて、『それは然うと、父上の御言葉に背き、色々のこと咄し、耻かしい。』

と何處までも無邪氣な挨拶。これを聞いて、『これで萬事上々吉。』とプロスペロは只ひとりほく〳〵點頭いた。

フェルヂナンドは尙ほ優しい言葉の數をつくし、自分はネープルス王の後嗣なるが、此方は王妃となつてくれる氣は無いかと云へば、ミランダは嬉しげに、此のやうな不束ものでよくば、天に誓うて否は無いと答へた。

フェルヂナンドは忝しと手を取りかはし、尙ほ行末の事細か

に語らはうとした時、もう宜き頃とプロスペロは二人の前に姿を現はし、そして言葉を和らかに、二人とも最早恐るゝことは無いぞよ。予が王子を苦しめたは、誠は心底をためさうばつかり。樣子は殘らず見屆けた。斯く眞心のわかつた上は、今改めてこの父が、女ミランダをば足下に參らす。親の口で言ふも異なものなれど、氣立から諸藝まで、世の万人に劣らぬ積り、隨分可愛がつて賜はれ、と改めて二人の結婚を許し、尙ほ一度巖窟まで歸つて來る程に、二人は此處を去らず待つてゐよと云ひ殘して立ち去つた。

(四)

プロスペロは巖窟に立ち歸り、エーリエルを呼んで、ネープ

ルス王並びに弟アントニオの樣子は如何にと尋ぬると、エーリエルが心地よげに物語る一伍一什は下の通り。二人の王には島へ上げてからも、いろ〳〵恐ろしい物を見聞かせて十分に心を戰慄せしめたさて斯く心痛と劇動とに疲勞させ飢渴を感じさせておいて、忽ち目の前に山の如く珍味を並べて、彼等に驚き且つ悅ばせ、二人が喜んで箸を取らうとした途端、突然その品々をかき消し、異形の鳥蛇、怪しき毒獸となつて食臺の上に立ち現はれ、驚き躁ぐ二人を捉へて散々にその舊惡を發き罵り、溫和なる兄、罪無き嬰兒を小舟に捨てゝ、大海の上に餓死せしめんと企みし殘忍非道の報いで、今日此の苛責に會ふのだと說き聞かせた、で、ネープルス王もアントニオも大きに前非を慚愧し後悔して、身を悶へ頭を搔き毟つてその身

を責めたる有樣、血なき鬼神のエーリエルにも憐れと思はるゝ程であつた、と逐一に物語つた。

プロスペロは聞き終つて、

『さもあらん〳〵。然らば直樣二人の者を此處に追つ立て來れ。汝精靈の身を以て憐れと思ひし程ならば、人間何として無情ならん。いざ疾く〳〵。』

の言葉の下、エーリエルは中に舞ひ上つて姿を消したが、ネープルス王、アントニオ、及び老臣ゴンザローの三人を追つ立て〳〵プロスペロの巖窟へ近寄らしめた。三人は前の怪異に驚いてゐるところへ、遽かに空中に凄じい樂聲が起つたので、驚き怖れて逃げながらも、つい、エーリエルに導かれて此の處まで來たのである。ゴンザローといふのは、プロスペロの父

子が小舟で流されし時、食物や衣類や書物などを密かに入れてくれた老臣であつた。

三人は恐怖と心痛とで惱亂してゐたので、今目前プロスペロに會うても、それと覺ることが出來なんだ、プロスペロは先づゴンザローに向ひ、『珍しや恩人、恙なかりしか。』と其の顏を見せたので、ゴンザローは不審に堪へず、熟々見れば、十年以前の舊ミラン國王プロスペロが變れる面影であつたので、驚き呆れたが、殘る二人の王の驚きは又一倍であつた。

やゝあつてアントニオは涙を流し、慚愧悔恨の辭を述べて罪を謝し赦しを請へば、ネーブルス王も已れの利慾より人の非道の企に左袒した事を心から詫びた。プロスペロは最早舊事を問はず快くこれを免したので、二人は大に悅んで、直樣

もとの領地を還すことを誓つた。プロスペロは改めてネーブルス王に向ひ、

『さて貴殿に參らする一品があるが、何と受取らるゝや。』

と云つて、起つて隔ての戸を開くと、こはそも如何に、次の室にはは溺死したと思つてゐた愛子のフェルヂナンドとミランダとが、睦じさうに將棊を玩んでゐるのである。

互に死んだものと思つた親子が、不思議の處で意はぬ對面をしたその喜びは又非常であつた。

ミランダもしみ〴〵驚いて、

『まあ立派な人達ばかり。人間世界といふものはどれ程廣いところぞ。』

と云つて皆々の姿を見詰め見比べて感歎してゐる。

テーブルス王は、ミランダの姿を見て、その美しさ氣高さに驚き、我が子に向て、『此の女性は何人ぞ、我等を引き分け又引き寄せた若しや女神では無いか。』と問ふので、フェルヂナンドは得意げに、

『いや〳〵神ではござりませぬ、しかし神かけて捌者が妻と定めし、姫。姫の父御ミランの公爵プロスペロ殿の許しを受け、二世を約せし我が妻、父上にも何卒御聞濟下されたし。』

かくと聞いて父王も滿足し、

『さてはそれなる姫は、彼の折の嬰兒であつたるか。プロスペロ殿、いよ〳〵合はす面なし。いや嫁御寮にも改めてお詫びお詫び。』

と挨拶した。プロスペロは泰然と、

『いや何事も昔は夢、その御挨拶には及ばぬこと。』

と云うて、更らに弟アントニオに向ひ、其の身領主の器にあらずしてミランの都を逐はれし事も、女ミランダが圖らずフェルヂナンドと相慕うて、ネーブルスの王妃となつた事も、皆これ畏き神の攝理に外ならねば、最早怨も慚愧も無いと寛仁大度の言葉に、アントニオは愈々面目なく、涙先だちて言葉は出し得なんだ。老臣ゴンザローは又、二國主が斯く和解したるを見て、嬉し喜び、はては聲うち揚げて若夫婦の幸福を祈つた。

斯くて、プロスペロは、一同の難破したと思つて居る船は、安全に島蔭に碇泊してゐて、乘組の水夫、家來一人も別條無く皆それ〴〵の處にゐるから、明朝は女と共に案内せんと告げ、尙ほ見らるゝ如き離れ島にて何の響應も出來ざれど、今宵はゆ

る〳〵父子がこの島に漂着の一伍一什を語り申さうと云つて、やをら席を立ち、更らに不思議の處分を行つた。

蓋し是れより先、カリバンはフエルヂナンド王の臣下の者にて、難船の結果他の人々と共に此の島に上陸してゐた某々といふ二人の愚者と結托して、密かに主人プロスペロを殺害し、已れが此の日頃の怨を晴らし、あはよくば母シコラックスの如く仕たい放題の我儘を働かうと企てたのであつた。然るところプロスペロはその千里眼の神通によつて夙にこの悪計を見ぬいたゆゑ、例のエーリエルに命じてカリバン始め二人の愚か者を翻弄し、恰も狐につまゝれた樣に恍惚たらしめて、うま〳〵と此の集會の場處まで連れて來させ、さて散々にたしなめたので、流石理のわからぬ獸の如きカリバンも恐れ入つて罪に伏し、二度とは悪い事は致しませぬと詫びた。

(五)

さて翌朝になつた。プロスペロはエーリエルを呼び出し、日頃の忠勤を褒めて、今日よりは暇を取らす自由を與ふるぞと言ひ渡した。抑々エーリエルは多年從順にプロスペロの命を奉じてはゐたものゝ、其の性もと自由を愛し、不羈に渴し、野の鳥の如く夏の風の如く、思ひの儘に空中を翔り歩いて、綠の林、紅の花の蔭に勝手氣儘に遊んで居るのが望みであつたゆゑ、この自由を得た折の喜びは眞に譬へやうが無かつた。

『我が快兒エーリエル。今こそ自由を得さするぞよ。』

とプロスペロが言ひ渡すや、エーリエルは天に拜し地に拜し、

『あら嬉しや、忝や。いでこの上は、今日のめでたき御出船に、我れは追手の風となつて、御本國まで海原安く御供せん。あら嬉し忝や。』

と躍り回り跳ね回つて喜びつゝ、節面白く歌ふを聞けば、

『蜂が蜜吸ふ、その花の露、
我れも吸はゞや、紅輪櫻の
臺はこの身の假の床、
鵂鶹鳴く時高枕。
夏は樂しや、蝙蝠の
羽根にゆらりと身を乘せて、
樂し、面白、あなうれし。
花の小枝は我が假の宿。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

寃術の秘書と寃杖とには最早用が無くなつたゆゑ、プロスペロは未練氣なく之れを島の土に埋めて了つた。怨敵は悔悟して無二の友となる、最愛の女はその最愛の王子と婚約を結ぶ。世にこの上の幸福は無い。たゞ片時も早く本國に歸つて、ネープルスに赴いて、めでたい婚禮の式に列りたいばかりである。勿論これにはネープルス王も大贊成で、其の儀式は世界を驚かすばかり盛んにしようとの發議。エーリエルが送る順風で、樂しき船路はいと安全に幾日かを經て伊太利のミランに着いた。（あらし終）

第十二夜（トエル・ヴス、ナイト）

（一）

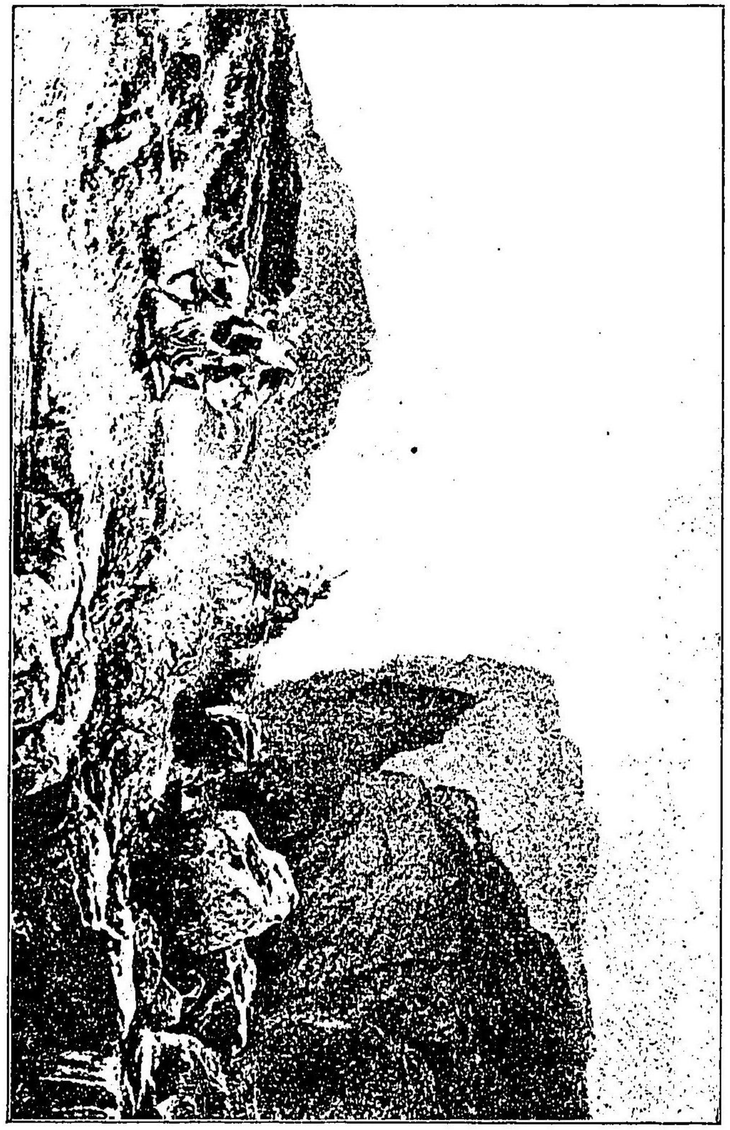
小亞細亞サイプラス島なるメッサリヤの一良家に男女の双生兒があつた。男の方をセバスチアンと云ひ、女の方をヴイオラと云つた。世にも双生兒ほど似たものは無いと謂ふが、此の兩人の肖やうは又格別で、顏容は固よりのこと、氣質から音聲まで、肖たとは愚か寸分違つた處といふは無く、若し男女の服裝を取り替へたなら、兩親とても恐らく見別け得まいといふ程であつた。その上に二人は極くの仲善しで、兄上と呼び妹と呼んで、片時離れず親んでゐたが、因緣といふものは奇なもので、二人は同じ年同じ月同じ日に生まれたばかりで

（『ハムレット』に、ローマを、ハムレットを、ハムレットを、）

第十二夜（トエルヴス、ナイト）

（一）

小亞細亞サイプラス島なるメッサリヤの一良家に男女の双生兒があつた。男の方をセバスチアンと云ひ、女の方をヴイオラと云つた。世にも双生兒ほど似たものは無いと謂ふが、此の兩人の肖やうは又格別で、顏容は固よりのこと、氣質から音聲まで、肖たとは愚か寸分違つた處といふは無く、若し男女の服裝を取り替へたなら、兩親とても恐らく見別け得まいといふ程であつた。その上に二人は極くの仲善しで、兄上と呼び妹と呼んで、片時離れず親んでゐたが、因緣といふものは奇なもので、二人は同じ年同じ月同じ日に生まれたばかりで



（『ハムレット』に、ーホラシオ、ホラシオ、ホラシオ、
世にも不思議なものがある、日月も及ばぬ不思議

無く、亦た同じ時に怖ろしい災難に遭つたのである。といふのは、或目的あつて二人が伊太利の北部へ向け航海したところ、途中（イリリヤは今のオーストロ、ハンガリー國の西部アドリヤチック海に濱する地方なり。）イリリヤの灘で俄かの暴風に遭つて、船は暗礁に乗り上げて微塵に砕けて了ひ、乗組は大半海底の藻屑となつたといふ始末である。

船が暗礁に當つて怖しい響をして砕けた途端、船長は水夫に命じて急ぎボートを卸させ、載せられるだけ乗客を載せて纔かに岸に漕ぎつけたが、残つた多數の運命は果して如何なつたことであらう。ヴィオラは幸ひにも船長に助けられて命を助つたが、最愛の兄セバスチアンは如何なつたかと思ふと。我が身の好運を喜ぶどころで無い。獨りうち萎れて歎いて居るので、船長は見かねて親切に慰めてやつた。

『何に彼の方なら心配なされますな、船の碎けた時丈夫な帆柱に取り附いて、直ぐと泳いで居なされた。私は見えなくなるまで見て居たが、始終浮いて居なされた樣であつた。大丈夫何處かに上つて居なさるであらう。』

ヴィオラはかくと聞いて大きに望みを得た。が、然うなると今度は自分の身の上が案じられて來るのは無理も無い。故郷離れて遙かの他國に如何して此の身を落ち着けたものであらうか、といろ〳〵思案の末、船長に此の國の樣子を尋ねると、『イリリヤの事ならばよう知つて居ます。私の生國は此の市からたつた三時間の路程の處ゆゑ。』と云うて更らに委しく語るを聞けば、此の國の領主はオルシノといふ公爵で、まだ年は若いが恩威並び行はれてゐる立派な君であるといふ

此オルシノの評判は。ヴィオラもかねて國許で聞いてゐて、まだ獨身といふ噂であつたので、今も然うかと訊くと、船長は、

『さやう、まだお獨身でございます、否、ございませうと存じます。私は一月前に此市に寄りましたが、その時まではまだ然ういふことでございました。それといふのも――いやこれは口善惡無い下々の噂なれど――此の市の某伯爵の姫樣にオリヤ樣といふ美人があつて、これにオルシノの殿樣がお心を懸けられて居らせられる。ところが此の姫樣の父御が十二月前に亡くなつて、總領の兄御樣と二人でゐられたところ、間も無く此の兄御樣もお亡りなされました。後には姫樣が唯つた一人、殊に此の兄御樣とは大の仲善であつたゆゑ、お歎きは又格別、誰れにも會はぬ、人に顏を見せぬと云つて、一室

に籠つて僻いてばつかり。』と物語して聞かせた。聞けばヴィオラも似た樣な身の上である。自分とても最愛の兄の生死も知らず、世にたより無く歎いてゐるところゆゑ、身につまされて誠に可哀相なこと、同じくは然ういふ方の側に居て、憂きを慰めあうたら、どの樣に嬉しからうと、ヴィオラは改めて船長に向ひ、どうか今の話を緣に、其の姫樣にこの身を召使つていたゞく樣世話をして下さい。』と賴めば、船長は頭を掉り、『それは至極の思ひ附きであれど六かしい、姫樣は今申した通り、兄御樣の亡られて以來誰れにも會ふのは嫌ぢやとあつて、此の國の御領主オルシノ樣をさへ奥へはお通しなされぬ位、所詮出來ぬ相談。』とかぶりを振つた。ヴィオラは詮方無くうち萎れてゐたが、咄嗟

の間に思案を變へ、『それならば寧のこと姿を變へて男になり、その領主の御近侍に召使つてもらふ工夫は無いか。』と相談した。女が男の姿になるといふも第一異なものなり、且つさうやつて長く勤めて居らるゝか否かも不慥かな譯ではあるが、斯る知らぬ國に只一人で、而も年若く姿美しき女の身でたゞ居ては却て身の安全も保たれまいといふところから、ヴィオラは思ひ切つて斯ういふ思案になつたのであつた。

すると、船長は俠氣な人であつたので、情を聞いて尤もと同意し、では一つ骨折つて見ようといふ事になつた。で、ヴィオラは肌に着けてゐた若干の金を船長に渡して、男の衣裳を誂へてもらつたが、注文は、兄セバスチアンが船で着てゐたのと全然その儘にといふのであつた。これはせめてもの心ゆか

しである。さて出來上つて來たので、髪を直してその衣裳に着替へて見ると、似たともく、セバスチアンと寸分違はぬ好少年が出來上つた。

さても船長は、ヴィオラに言ひ含めてシザリオと名を改めさせ、便宜を求めて公爵オルシノに謁見させた。公爵はその秀麗優雅なる少年を見て、大きに喜び、すぐ樣近侍の中に加へて召使はるゝことゝなつた。ヴィオラは願ひの叶ひしを神に謝し、心の限りを盡して、此の賢明なる公爵に仕へた。さる程にヴィオラが品格なる行儀と、陰陽無き奉公振りとは忽ち公爵の目に留まつて、公爵はヴィオラのシザリオをば又無きものに愛でいつくしんだのであつた。

斯くて彼の思ひに堪へかねた折ふしの夕べなどには、ヴィ

オラを呼んで、過ぎにし戀の物語をなし、長き思ひの斯ばかりの誠も、つれなき人の胸には入らで、いつまで草のいつまで斯る物思ひをすることぞと搔き口說き歎かるゝこともあつた。實に痛はしきは公爵である。賢明にして情深き良君にてありながら、叶はぬ戀に身をやつし、此の頃は遊獵を始め戸外の運動とては少しもせず、又常の樂みの學ある貴族を集めて物語りするといふ事も無く、春の日ねもす垂れ籠めて、或は樂師に戀の歌を歌はせ、或はシザリオを相手に果なき事を語り暮さるゝばかりである。そこで物堅い老臣共の中には、主君オルシノを敬愛するの餘り、新參のシザリオをば御爲めに宜しかるまじと諫をまゐらする者さへもあつた。

（二）

實際ヴィオラの如き年若き女の身で、公爵の如き世に勝れた人の側に侍き、剰へ心の友と信ぜられて、戀の秘密まで打明けられる位危險なことは無い。ヴィオラは日々側に居て、公爵が切なる思ひの程を見聞くにつけて、何一つ足らぬ事無き優れたる器量の御身にてありながら、個程までに思ひを惱ましたまふとは、あゝ御痛しいと思つたのが抑々で、その身も何時しか公爵オルシノに對して切なる思ひを抱くやうになつたのである。さらぬだに缺點無き公爵を、戀する目をもて見れば、世に斯くばかり優れた殿が又とあらうか、威もあり情もあり、學問といひ人望といひ、揃ひも揃ひし斯程の御方を、オリヤ樣とやらは何故に御嫌ひなさるゝことぞ。不思議なと

云はうか、妬ましいと云はうか。そんな明き盲目のやうな姫樣を强ひて御慕ひ遊ばすとは、ほんに勿躰なうて腹が立つ樣なと、ヴィオラは熟々思つた。

或日とう〳〵堪へかねて公爵に向ひ、『あの、これは全然の種の無いことでもございません、若しさる處にさる少女がありまして、丁度殿樣がオリヤ樣をお慕ひ遊ばす樣に、殿樣を御慕ひ申して居りますとお思ひ遊ばせ。すると殿樣の方では何ともお思ひ遊ばさぬと致しませう、その時分、殿樣には其の少女に、氣の毒ながら其方の思は叶はぬぞよときつぱりお斷り遊ばす譯には行かぬでございませうか、又其の少女はそれで思ひ切つては惡いのでございませうか。』と謎をかけて見た。

が、公爵はなか〳〵御承知無く、『それは然うでも男と

女とは格別ぢや、いはゞ女は薄情なもので、とても自分がオリギャを思ふ樣に、男を思ふ事は出來まい。』といはれる。この論にはヴィオラは大反對であるが、明けてはそれとも言はれぬので、『それでも手前は承知致して居る事がございます。』と云へば、『何を承知してをるのぢや。』と尋ねられる。『はい、よく手前は承知して居りまする、女と申しましても戀の情にかけては、我々男に劣りは致しませぬ。私の父に娘がございまして、其娘が或る男を戀慕致しました。私が若しや女でございましたなら、無躾ながら殿樣をば命にかけてもお慕ひ申すことでございませうが、丁度その通り慕うて居りました。が、如何した譯か娘は其の戀を誰れにも話さず、獨りくよ〳〵致して居りまして、蕾の中の蟲のやうに人知れず戀を藏して居

りましたので、その蟲めが段々と石竹色の頰の血を吸つて青白く致しましたが、それでも娘はあの『忍耐』の石像のやうに、昵と悚へて泣きたさうな笑顔をしてゐたのでございます。』と他事にして熱心に話すと、公爵も追々引き込まれ、『その娘はごかれ死に死には致さなかつたか。』と熱心に尋ねられる。素より根は作り事で、その身の心を匂はせて見たばかりゆゑ、ヴィオラも此の返事にはハタと塞つて、然るべく後を繕つて話を止めた。

此の話の丁度終つた頃、一人の家臣が外から歸つて來た。これは公爵がオリギャの許へ送られた使である。

『公爵樣、恐れながら下官も追ひ拂はれることかと存じをりました處、今日は姫樣よりお小間使を以ちまして、下の如き御

返事でございました。即ち今から七年の間は誓つて何方にもお目にかゝらない、尼樣のやうに被帽を被つて、一室の中で泣き通すのぢや、と斯樣でございまする。』

公爵は嗟嘆の聲をもらした。『あゝ兄が生前の愛の返禮に、斯くばかりの心中を盡す位なれば、若し戀の神の金の箭を受けたならば、如何ばかりの誠情を表はすことであらう。』と云ひつゝヴィオラに向ひ、

『これシザリオ、身が戀の一伍一什は其方に話しておいた通りぢや。大儀ながら其方も一度參つてくれ。構へて必ず追ひ拂はれぬ樣に、何と云つても面會の出來るまでは、戸口に根を下ろす積りでの。』

『はい、お易い御用でございます。さて御面會の叶ひました

ならば。』

『おゝ、その時は、身が思ひ焦れて居る樣子を篤りと話してくれ、始終の樣子を殘さぬ樣に。身が戀の面影を描すには其方に勝つた役者は無い。先方も無骨な使が行つたと違つて、必ず身を入れて聞いてくれよう。』

ヴィオラは仕度を調へて出て行つた。その身の今の役回りは、我が命にかけても思ふ戀人を他し女に取り持たねばならぬ、妬ましともつまらないとも、是れ程面白くない役目は無い。けれども主命なれば是非に及ばず、兎も角も誠實に骨を折つて見ようと決心した。

さてもオリヰヤは公爵の使を返して、例の一室に閉ぢこもり思ひくしてゐると、遙かの戸口にあたつて鮮かな聲がして

音なふ者があつた。程なく小間使が這入つて來て、『お姫様、又お人が見えましてございます。お姫様は只今御病氣でございますと申しますと、御病氣は存じてゐる其の事で伺つたのだと申されます。只今お寢つていらつしやいますからと申しますと、それも存じてゐる、その事で參つたのだと申されまして、何と申しても存じてゐる〳〵とばかり。私には致し様がございませんどうしても御會になるお積りと見えます。如何致しませうか。』といふ。オリヰヤは眉を皺めたが、今までの使とは風が變つてゐて、可笑しくもあり、それ程に言ふのだから一寸會つて見ようかといふ氣にもなり、『ではお通し申して。』と小間使を出して、例の被帽を深々と被り、是つ切りとして、もう一度公爵の用をきいて見ようと椅子によりて待

つてゐた。ヴィオラは眞の丈夫のやうに、足取り確りと姫の室に通り、領主の近侍たる上品な音調で、『これは卒爾ながら御主人の姫様でございますか。手前の台詞はめつたな方へは渡されぬのでございますから、――哀れにおかしく書き卸してございまして。』と先づ變つた口上を述べたので、姫は少々意外で、それでは何方からお見えなされたのであるぞ。と問ひ反した。『そのお答へは此方の書拔にはございませぬ、手前は覺えただけしか申されませぬ。』とまだ妙な事を云つてゐるので、『では貴郎は如何いふ方であるぞ。』『さあ早く申せば役者の様なものでございます。』とヴィオラは戯れて答へたものゝ、其の實今日の役目に限らず、實際女でありながら男の姿になつてゐるのであるから、役者といつても差閊の無い

身の上だと、内々おかしさを禁じ得なかつた。て、重ねて貴郎がこの家の御主の姫様かと問ふと、『如何にも。』とあつたので、主人の使命の方は一寸後に回して、戀の敵のオリヤ姫の顔が見たくなり、『では無躾ながら先づお顔を。』と大膽に言つて見た。すると戀はくせ物で、明君オルシノをさへ長の月日の間無情くもてなしてゐたオリヤが、今しも被帽の中からちらと見たシザリオの姿に忽ち迷つて、つい〳〵云ふがまゝになつて了つた。

『案ずるに貴郎は御主人の言ひ附て、妾の顔を見屆けに見えたのでありませう。』

と言ひつゝ被帽を取り外し、

『さ、幕を明けました、よう人形を御覽なさい。美しう出來て

……盲亡がーィクンパさざまさま……
（第トルバルギ、ンヨジ、アリー、三『スペクマ』）

居りませう。』

ヴィオラはつく〴〵見て、流石に驚いた。

『いかにもお美しい。いや造化翁が丹誠の傑作と見えまして、肉附きといひ着色といひ、憎らしい程お美しいことでございます。それにつけても、此の良い型を後世にお殘しなされぬ様では、上も無い罪でございませう。』といふに、オリヂヤは少し斜になつて笑ひ、

『とはまた如何いふ罪であらうぞ。世界が生んだたゞの容貌で、口が一つに目が二つ、手足が二つづゝ附いてをるだけの事、それを捉へて兎やかうと仰るは、あゝ聞こえた、あなたはお役目で妾を褒めに入らつしやつたのか、さあ、たんと仰つて下さい。』

と云ふので、ヴイオラはこゝぞと、

『え、申します、とも、申さいで何としませう。お前様は實に高慢過ぎた、イヤサ矢張りお美しい姫様でございます。その お美しさが手前主人の戀の種となりまして、それは〳〵明暮と無き物思ひのお痛はしいこと、その様子を一目御覽じたら、なんぼ貴女が美人國の女王でも相應な御返禮は遊ばすべきでござりませう。オルシノ様には、長い〳〵この日頃、歎いたり欝いだり、たゞお前様の事ばかりを思ひくしてお在で遊ばしまする。』

と嫉妬の念も忘れて熱心に說き立つれば、オリヰヤも流石に氣の毒になり、

『それはもう、よく伺つて居りまする。併し殿様にも妾の心は疾く御承知の筈である。高慢なと卑視もなされうが、何故にか妾は殿様を慕ふことは出來ませぬ。御品行なら御身分ならお人柄なら、何一つ瑕の無いことも知つてゐる。學問が有つて優しくて男らしいと世上でも專ら噂なれど、どうした困果か妾には氣にそまぬ、これはとうに彼の方に明けて申しておいたこと。』

と詫びる様に言ふのである。ヴイオラは尙ほも熱心に、

『實際、主人のオルシノ様ほどに手前が貴女をお慕ひ申さば、御門前に小屋でも構へ、朝夕貴女の御名を唱へ、貴女を題に歌を作つて歌つて〳〵歌ひ通し、岡にも林にも聲を響かせ、貴女が憐れと覺召すまでは、お寢らせ申すことではない。』

と何處までも果しなければ、オリヰヤは少し持て餘し、

『何卒、たんと心任せに。』と云つて、話を變へ、
『あの失禮ながら、貴郎の家柄は。』
と問うた。ヴィオラは平然、
『身代などは御座いませねど、併し筋目ほどは歴とした、矢張り紳士でございます。』と答へた。
オリヤは、何時までも此の近侍と話して居たいは山々であつたが、召使共の思はくも如何と思つたので、話を切り上げ、
『殿様へは、どうあつても御意には隨はれぬと傳へて下さい。この後お使者は御無用でございます。――尤も貴郎が來て下されうならば、それは格別。』
と云ひかけて手を差出せば、ヴィオラも立ち上つて其の手を握り、

『それではお暇致します、テモまあ情知らずのお姫様。』
と云つて、そのまゝ立ち歸つた。

（三）

ヴィオラの歸る後を見送つて、オリヤは暫く恍惚として ゐたが、やがて口の中に、『身代などは御座いませねど、併し筋目ほどは歴とした、矢張り紳士でございます。』とシザリオの言葉を繰り返し、『如何見ても紳士、ほんに紳士に違ひ無い。物の言ひ様、顔容、擧止から氣象まで、立派な美しい紳士ぢや。』と獨言を言ひながら、あゝ世の中はまゝにならぬもの、いつそ今の近侍が公爵であつたなら、と思ふと共に我れ知らず顔を紅くした。如何にもはしたない事である。一目見たばかりで

素性も知れぬ男に戀するとは何事、と我身をたしなめたが、勿論思ひ切ることは出來なかつた。身分といひ財産といひ雲と土ほどに違ふ、對手は近侍風情だとて、それが何の恥かしからう、此の上は如何あつても、と女の愼みも忘れて、たゞ一筋に思ひ詰めたのである。

そこで忽ち思案を定めて、直ぐ樣僕を呼び、金剛石の指環を持たせて、近侍シザリオの後を追はせた。――オルシノの殿樣より此の身へとの思召は辱なうあれど、指環ばかりはどうしても戴かれぬゆゑ、何卒お持歸りをと云つてシザリオに渡させた。是れにて少しは思ひの程もわかるかといふ苦しい知惠である。シザリオのヴィオラは不審に堪へなかつた。自分は指環を持つて行つた覺えも無ければ、曾てそんな話も聞

かぬ。さては最前の樣子といひ目使ひといひ、公爵の戀人オリ、井ヤには、若しやこのシザリオをば何とか思うてゐられるのではあるまいか、と可笑しくもあり憐れにもあり、『ホヽヽ、矢張り夢の中の人に戀する樣なの。それにつけても姿を變へてゐるほど罪な、もどかしい事は無い。姫樣が自をお慕ひなされたとて、自らが公爵樣を慕うたとて、男の姿してゐては埒が明かぬ。』まあ何といふ浮世であらう。とんだ戀の三すくみが出來たものだと、ヴィオラは笑ひを忍んで歸つて行つた。

さてオルシノの館に歸つて、使命の目的の遂げられなかつた一伍一什を傳へ、所詮叶はぬ事と思召して、此の上の御心勞無き樣にと諫めたけれど、公爵はまだなか〳〵思ひ切り得な

い。重ね〳〵で氣の毒なれど、又折を見て――明日にでも、一度行つてくれい。少しでも露ほどでも姫に憐れと思はれればそれで本望と切なる頼み。さてその明日さへに待遠しさに得堪へでや、樂師を呼んで例の歌を所望せられた。

『シザリオ、其方も聽いてゐて覺えて見やれ。身は昨夜此の歌を聽いて大きに氣を慰めた。日の暖かな戸外で絲採る娘共や草刈る男共がよく歌ひ、機織る女もよく歌ふつまらぬ舊い歌ではあれど、身は甚だ好ぢや、無邪い戀の心がよく表はれてゐて。』

樂師は、やがて調子を調へて歌ひ出す、

俚謠

『いざやいざ死神、

松の木蔭にこの身をうめよ。
絶えよ玉の緒、とく絶えよかし。
情無き人に殺されて、
死ぬるこの身の哨小袖つらや。
誰がかばかりに憂きを見し。
他し情の花束を、
我が棺にはな投げそ。
友が涙の露とても、
友が亡骸には何かせん。
泣いてたもるも皆益無きに、
ゆめな知らせそよ我が墳墓を。』

＊　＊　＊　＊

と哀れに歌つた。ヴイオラは果なき戀の哀れな調子を身にしめて、一語も殘さず聽き取つて、思はず涙を落した。公爵はうち驚き、熟々とヴイオラの顏を眺めながら、

『これシザリオ、其方は今の歌に落涙を催すといひ、其方が面にたゞならぬ色の見ゆるは、其方も若年ながら心に覺えがあつての事か。どうぢや。』

と尋ねられた。

『はい、恐れながら、聊か物の哀れを知りそめました。』

『ム、、左樣か。してそれは何ういふ女、年は幾歳位。』と公爵は他人の戀も聞きたさに迫き込んで尋ねられる。ヴイオラは伏目に、公爵の熱心なる面を見詰め、

『恐れながら、公爵樣と同じ年輩にて、且つ寸分變らぬ擧止にござりまする。』

と答へた。公爵は近侍の戀人が、公爵自身であらうとは夢にも知らぬのであるから、さて〳〵變つた事、乃公程も年上で、乃公の樣に無骨な女を、此の美しい少年が思ひ込んでゐるのか、實に戀は樣々のものぢや、と可笑しく哀れに思はれたのである。

翌日ヴイオラは公爵の使で再びオリヤを訪ねた。這度は戸の口で押問答をする手數も無く、ずつと姫の部屋に通された。今までは何方が見えても毛蟲を追拂ふ樣に仰つた姫樣が、公爵樣の美しいお小性が見えると、打つて變つてそはそはして、御自分で戸をお明けなされたり、椅子をお直しなされ

たり、長い間のお話、マァおかしらしい、と小間使から下部まで噂とり〴〵。　さてヴィオラが昨夜の公爵の樣子を物語り、今日は是非に色好い返事をと迫る、オリギヤは頭を振つて否んだ。

『何卒もう公爵樣のことだけは仰つて下さるな。　その代り或他樣の御用なら、悅んで聽かう程に……本統にあの……貴郎の聲を聽いてゐれば、まるであの音樂を聽いてゐるやう。』と隨分切り込んで言ひ出したれど、それでもヴィオラはまだ覺らず顏でゐるので、オリギヤは到頭意を決して、あから樣にその身の思ひをうち明けた。

『さあ、斯う言はゞ、さぞ吃驚もなされう、無躾な女ぢやとお卑視もなされうなれど、今を春べのこの庭の薔薇に誓ひ、末通女の潔白に誓うて、虛僞りは無い。　道理も思案も餘處にし、只一筋の眞心。』

と熱心に搔き口說いたが、ヴィオラは顏の色をさへも動かさぬ。　斯る理無き事聞く上は、二度と再度公爵の使となつても來まじき事、姫の思ひを叶へざるその代り、その身も誓つて女性をば戀ひすまじき事を、荒々しく言ひ放つて席を立つた。

ヴィオラが袂を拂つて姫の部屋を出ると、思ひ懸けなく一つの珍事がその身に迫つて來た。　この市の一紳士で疾くよりオリギヤに思を懸けてゐたのがあつたが、姫は已れを嫌つて面會を斷ちながら、公爵の近侍を屢々通して欺待するは其の意を得ずと、門前に待ち構へ、ヴィオラのシザリオを捉へて決鬪を挑んだのである。　ヴィオラの迷惑は如何ばかりであ

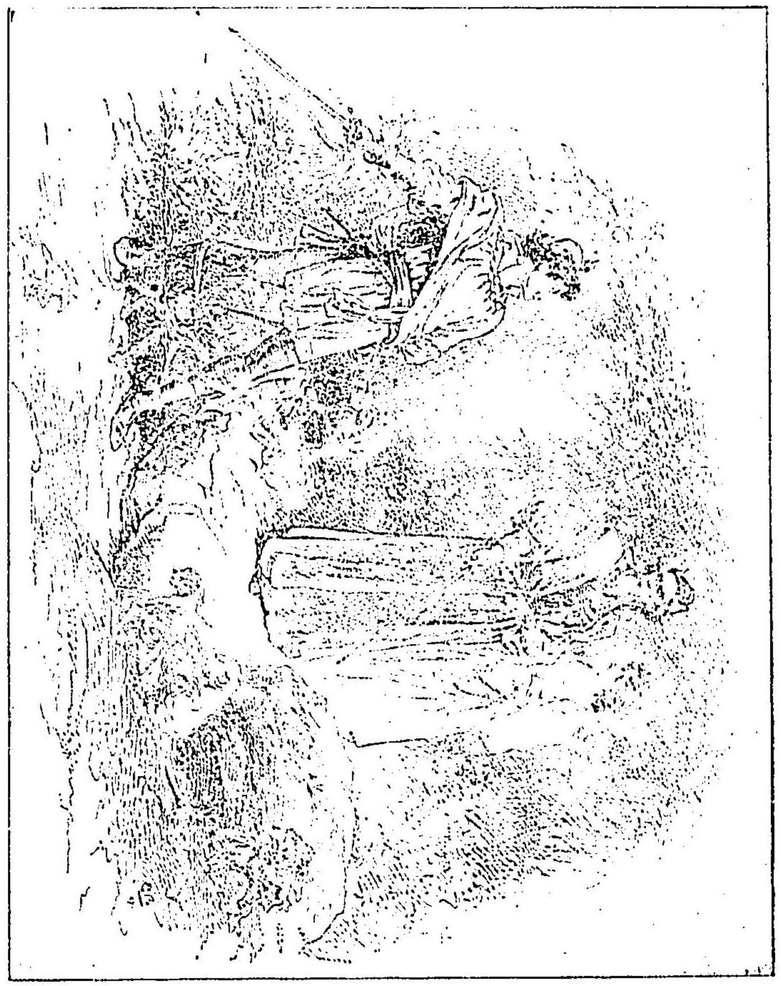
ら う。彼れは男裝して立派な少年とはなつてゐるものゝ、心はどこまでも手弱女で、その身の佩びた劍を見てさへ頭へる位であるのに、どうして決鬪などが出來ようぞ。

兎角する間に、彼の紳士は劍を拔いて迫つて來た。ヴィオラは絶躰絶命、もうこの上は、實際その身の女であることを白狀して難を脫れるより他は無いと、あはや聲を上げんとした其の途端、恰も好し、一人の丈夫、ヴィオラの難を見るより矢庭に驅けて來て、相手の前に立ち塞り、『何事か存ぜぬが、これは拙者の親友ぢやによつて、拙者が代つて承らう。是非にとあらばお相手も致さう。』と劍に手を掛けて身構へた。見れば骨格逞しき立派な丈夫であつたが、ヴィオラは親友どころか曾て見たことも無い人物である。で、驚きながら、兎も角も厚

意を謝せんとしてゐると、又、向うよりバラ〳〵と四五人の役人が現はれて、今の男を取り圍み、『やあアントニオ、數年前の事忘れはすまい、尋常に公爵の館まで連だつて來い。』と迫つて來た。彼の丈夫は聞くと忽ちに勇氣くぢけ、ヴィオラに向つて氣の毒げに、

『おい兄弟、此の通りの次第だから、濟まないが拙者の財布を返してくれ。實に言ひ惡いが、此の通りだ。仕方が無い。惡く思はないで返してくれ。尤もだ驚くのは尤もだが、仕方が無いんだから。』

と手を差出した。ヴィオラにはさつぱり分らない。財布とやら預つた覺えも無ければ、顏も知らぬ人ゆゑ、一應その由を役人に辯解した。がその身の難を救くつて、それに恩がある



（『通俗世界文學第四編』）

ので、持ち合せて居た金を殘らず與つて、これで仕舞つてくれと云つたが、もとより少額ゆゑ役に立たぬ。男は怨の眼にヴイオラを睨み、人々に向ひ、『この義理知らず奴を見てくれ、嘗て死にがゝつてゐたのを拙者が助けてやつた少年だ。そやつの爲めに拙者はイリヤまでやつて來て、この災難に遭つたのだ。』と齒嚙みをなして悔い怒つたが、役人は耳にもかけない、『それを此の方が聞いて何になる。』と委細構はず引つ立てゝ、役所の方へ連れて行つた。男は口惜さうに尚も聲張上げ『恩知らずのセバスチアン奴、人で無し奴、顏だけ奇麗な腐れ人形奴、親友の難儀を見てゐて見殺しにするのか。』と男泣きに泣き立て喚き立て、後を振り向き〳〵姿の隱れるまで詈り號んで行くのである。

ので、持ち合せて居た金を殘らず與つて、これで仕舞つてくれと云つたが、もとより少額ゆゑ役に立たぬ。男は怨の眼にヴイオラを睨み、人々に向ひ、『この義理知らず奴を見てくれ、嘗て死にがゝつてゐたのを拙者が助けてやつた少年だ。そやつの爲めに拙者はイリヤまでやつて來て、この災難に遭つたのだ。』と齒嚙みをなして悔い怒つたが、役人は耳にもかけない、『それを此の方が聞いて何になる。』と委細構はず引つ立てゝ、役所の方へ連れて行つた。男は口惜さうに尙も聲張上げ、『恩知らずのセバスチアン奴、人で無し奴、顏だけ奇麗な腐れ人形奴、親友の難儀を見てゐて見殺しにするのか。』と男泣きに泣き立て喚き立て、後を振り向き〳〵姿の隱れるまで罵り號んで行くのである。

四

ヴィオラは、今の男のその身をセバスチアンよと言るのを聞いて不審に堪へず、追つかけて仔細を聞かうとしたが、そのうちに彼等は見えなくなつた。若しや自分は兄のセバスチアンと間違へられてゐるのでは無いか、今の男が助けたといふからは、兄は助けられて生きてゐるのであらう。何にもせよ良い便であつた、とヴィオラは大きに悦んだ。實際それはその通りであつたのだ。今の男はアントニオといつて、或る船の船長であつたが、彼の難船のあつた時、セバスチアンが帆柱につかまつて浮きつ沈みつ流されて、大方冷え死んでゐたのを見つけると、直ぐ樣自分の船に引き上げて、樣々に介抱

して助けてやつたのである。それより二人は親交を結んで、何處へ行つても互に離れまいと云つてゐたが、セバスチアンが彼の公爵オルシノの賢明なる評判を聞いて是非會つて見たいと言ひ出したので、アントニオは少々冒險ながら枉げて同意して、共にこのイリリヤに來たのが災難の基であつた。

といふのは數年前に、アントニオはこの海上で大喧嘩をして、公爵の甥を酷く傷けたことがあるので――彼れが今しも引つ立てられて牢屋に入れられたのも此のゆゑである。で、アントニオとセバスチアンとが此の市に着いたのは、アントニオがオリヤ姫の屋敷の前でヴィオラの難儀を見てより數時間前であつたが、アントニオは白晝に市内に這入ることは出來ぬので、その財布をセバスチアンに渡し、では一人で行つ

て來たまへ、欲しい物があつたら何なと買つて宜しい。拙者は此の旅宿で待つてゐるから、何時頃には必ず歸つて來たまへと云つてセバスチアンと別れ、自分はたゞ一人旅宿に待つて居た。處が、約束の時間になつてもセバスチアンが歸つて來ぬので、心配で堪らず、とうゝ危險を冒して自身に捜しに出ると、このオリヤ姫の屋敷の前でセバスチアンが誰れかに强迫されてゐると見たので、矢庭に飛び込んで、代つて決鬪しようとしたのであつた。是れは實はセバスチアンでは無くヴィオラであつたが、着物から顏容までそつくりその儘ゆゑ間違へたのである。そのうちに役人に取圍まれ、自分は災難に遭つたのを、相手は恩を忘れて知らぬ顏をし、入用の財布を出してくれぬのだから、アントニオの怒り怨んだのは無理

も無い。

が、斯ういふ仔細は後に至つて解つたのであるから、今の處は何が何やら、彼の決鬪を挑んだ紳士の如きは、全で狐に魅まれた同樣で、劍を拔いたまゝ茫然として一同の後を見送つてゐた。そこでヴィオラはこの紳士が再び鬪を挑まぬうちに、一散に驅りて歸つた。取り殘された紳士の馬鹿な面といつたら、愈々繪にも畫けない。

紳士は獨りブウ〳〵怒りながら暫く向うを睨めて居ると、今の近侍が再び取つて返した。ござんなれ、今度こそはと呼びかけて『さあ、最前の勝負しろ。』と劍を揮て打つてかゝつた。今來たのは近侍ヴィオラでは無くて、その兄のセバスチアンであつたが、例の同じ着物に同じ顏容ゆゑ、また間違へられた

のだ。セバスチアンは不意の襲擊に驚いたが、問答の暇も無く、ヒラリと身をかはして空を斬らせ、拳を固めてエイッと一つ敵の眉間をまゐつておいて、自分も劍を拔いた。

那の時早く此の家の內から飛んで出て、二人の間に這入つた美人がある、オリギヤだ。姫は物音を聞きつけて出て見ると、懇し近侍が切合つてゐるので、矢庭にその手を取つて內に引き入れ、內からハッタと門をめて了つた。そしてセバスチアンを居室に連れ歸り、妾ゆゑにこの御災難、どうぞ御免遊ばして、と心を盡して勞るのである。セバスチアンは、ヴィオラと間違へられてゐるのとは氣が付かず、始終の事が少しも解らない。だしぬけに白刃の御見舞、突然に美人の秋波、何と挨拶して好いか解らぬので、宜き程にもてなして、する儘になつ

てゐると、姫の方では近侍が先刻の樣子と變つて自分に優しくなつてくれたのが何より嬉しく、尙ほ樣々に機嫌を取つた。

セバスチアンは愈々不審ではあつたが、他人の親切を無下に斷るもいかゞなり、又遣がに美人の待遇を嬉しく思はぬでも無いので、一言二言姫の深き心を謝すると、オリギヤは心の屆きしことを悅んで、腰元下部を差圖して尙ほいろ〳〵と彼れを款待した。

セバスチアンはいかにも不審に堪へられず、若しや此の美人は狂氣したのではあるまいかと思つた。そこで樣子に氣を注けて見たが、召使どもに物言ふ條理と云ひ、召使の姫に對する擧動といひ、毫も變つた所は無い。たゞ我れを一目見たばかりで、斯くまで戀着の情を表はすとは、斯る大家の娘としては、ちと輕忽に過ぎると思はるゝばかりだ。

よく〳〵見れば、氣立もどうやら宜ささうなり、器量は勿論絕世の美人ゆゑ、セバスチアンも心を落ち着けて憎からず語らうた。

すると姫は有頂天になり、又もや御意の變らぬうちに、早う祝言を濟ませたいと、流石世間見ずの氣は一筋に、幸ひこの家に牧師も居りまするゆゑ、明日ともいはず今日の中に、と急き立つれば、男も餘り早急とは思つたが、何も緣なり、神の思召次第と直ぐに同意し、足もとから鳥が立つ樣な家中遽かの大騷ぎで、四海波靜かに風枝を鳴らさぬ後園の一室に牧師が聖典の文句讀み上げて、伯爵家の婚禮の儀式は、目出度手輕に終つたのである。

（五）

婚禮の儀式が首尾よく濟むと、セバスチアンは新嫁に向ひ、今自分の親友が旅宿で待つてゐるゆゑ、一寸一走り今日の目出度い便を聞かせて來ると云つて、新嫁の止めるのを無理に、暫くの間と固く約束して出て行つた。

間違へば間違ふものと、世話に云ふのは正しく是れ。セバスチアンが出で行くと間も無く、公爵オルシノは近侍のシザリオ其の他若干の家臣を連れて、姫の屋敷にお越しになつた。先刻の役人も彼のアントニオを高手小手に縛めて、公爵の目通りに引き連れて來た。

アントニオは面を上げて此方を見ると、公爵の側に彼のセバスチアン(彼れは矢張りヴィオラをセバスチアンと思つて居る)が居るので、さも悔しさうに公爵に向つて、その不實者を罵り、如何にして自分はその少年を助

けたか、その後如何に親切を盡してゐたかといふ始終の事を細かに話し、『實この三ケ月といふものは、晝夜離れぬ位にしてゐました。』と云つた。

折しもオリヰヤは表の方に又騷しい物音がするので、又もや戀人に變事でも起つたでは無いかと、飛んで來て、思はず公爵と顏を合せた。公爵はうち驚き、『や、今日は如何なる日であらう、天女が地を歩ませたまふは！』と云ひながらアントニオに向ひ、『だが、其の方の言ふ事は狂氣とほか思はれぬ、然言ふ三月の間此の誠實なる若者は、片時離れず身が側に出仕致してゐたのぢや。』と、役人に命じてアントニオを傍らに引つ立てさせた。

シザリオを辯護した此の言葉のまだ消えぬうちに、公爵みづからがアントニオにも增して、此のシザリオを怨み憎まね

ばならぬ樣になつた。――オリギヤはシザリオを見ると、いそ〳〵其の側に驅け寄り、目前公爵の在るをも構はず、獨りシザリオをもてなした。姫の言葉を默つて聞けば、近侍は公爵の使でオリギヤの屋敷に往復しながら、大膽にも主人の戀を横取りして、どうやら怪しき緣まで結んでゐる樣子である。此の有樣を見ては、流石賢明なる公爵オルシノと雖も、嗔恚の炎を胸に燃さざるを得ぬ。直樣シザリオに向つて嚴しく詰問し、『いで、この上は暴逆の君と誹らば誹れ、醜き嫉妬の犬となつて、不憫ながら正當の復讎を行はずばなるまい。さあ小伜奴、屋敷へ參りをろう。』と怒りの面色に無念の涙を濺いで公爵は立ち上つた。

ヴィオラはこの上も無き災難ではあるが、その身の密かに

戀ひ慕うてゐる公爵が、無念の思ひを慰める爲めとあらば、身は八ッ裂きにせらるゝも本望と、戀ゆゑ强ひて心を据ゑ、屠所の羊の悲しげに公爵に隨いて立ち上つた。オリギヤは氣が氣で無い、折角思ひが叶つて、今婚禮をするかせぬかに、最愛の良人は引つ立てられて行くのであるから、我れを忘れ縋り附いて引き止め、『シザリオ樣、どうでも行かねばなりませぬか。』と云ふに、シザリオは『はい、公爵は私の命よりも大切でございます。』と云つて振り放した。オリギヤはワッとばかり泣きだしたが、一生懸命、最早秘密も何も構つてはをられぬ、シザリオ殿は妾が正當な良人でございますと聲高く言ひ放つて、彼の牧師を呼び、最前婚禮の式を擧げたことを證言させた。ヴィオラのシザリオは大きに驚き、決して婚禮などを爲た覺えは

無いと言ひわけしたが、姫も牧師も承知せぬ。公爵は樣子をとくと聞き定め、さては疑ひも無く近侍奴は我が戀人を私したに極まつた、『併り者、來をれ。』とヴィオラを引つ立て、オリギヤに暇を告げて立ち歸らうとした。折しもあれ、奇なる哉不思議なる哉、表の方より又一人のシザリオが驅込んで來てオリギヤに向つて『我が妻』と聲をかけた。これぞ誠の良人セバスチアンであつた。驚くオリギヤ驚く人々、こは〳〵如何にも見比ぶれば見比ぶる程、顏容から音聲、擧止、服裝まで寸分違つた所といふは無く、どちらが前のか、どちらが今のか忘れて了ふ位であつた。二人が互の驚きも亦たこれに劣らぬ、『こなたが手前か。』『手前がこなたか。』これはしたりと、二人は宛然鏡に向つて物言ふ心地して、一言二言問答したが、餘りに

突然の對面ゆゑ、これが兄のセバスチアンだとはヴィオラも直ぐには氣が付かず、セバスチアンは尙ほの事、これが妹のヴィオラの男裝せる姿とは思ひもよらず、共に暫く茫然としてゐた。併しそのうちにヴィオラは最前のアントニオの詞を思ひだしたので、忽ちそれと覺り、兄上セバスチアン樣か、なつかしや、姜は妹のヴィオラでござりまする、不思議な處で御對面、と包まず名乘つて、その身の男裝してゐる仔細を人々に物語つた。

人々は夢の覺めたやう、奇にして奇ならず、不可思議にして不可思議ならず、さては双生兒の兄妹であつたか、と一切の錯語はこゝに解けて、驚くもあり歎ずるもあり、はては諸共にドッと笑つて、オリギヤ姫が女に戀をした風流な間違へをおか

しがつた。　オリギヤは今更面目無いやら可笑しいやらで、席にもいたゝまらぬ位であつたが、彼の間違へて結婚したセバスチアンの風采を見直すと、シザリオよりは又何處か男らしい所があるので一段嬉しく思つた。

さてオリギヤに對する公爵の戀は、全く畵餅に歸して了つた。　姫は既にセバスチアンと結婚した上は、もはや思ひを惱すにも及ばぬのである。　かく思つた刹那に、公爵の心は近侍シザリオに向つた。　シザリオは今しも一個の少女に變じたのであるが、さて乙女だと思つて見れば、その佳麗の質は更らに目につかざるを得ぬ。　彼れが儔なく都雅なる風采は、疾くより公爵の目に止つてゐたのであるが、これをして若し本來の女の姿に裝はしめたなら、又どの位の美しさを生ずること

であらう。　且つや其の氣立の優しきことは、日頃によつてよく解つてをる。　それのみならず、時々は謎の樣なことを云つて、此の身に思ひある由をほのめかしたこともある、若し女であつたら命に替へても我君をお慕ひ申すと屢々云つた、――まんざら此の身を慰める爲めばかりとも思はれぬ。　今も今とて身が怒りに任せて彼れを刑せんとしたに、彼れは逆はず惡びれず、生命を此の身に捧げんとした、――　いぢらしい心根である。　思へばこれも神の配劑、狐疑は却つて畏れあり、と公爵は忽ち心を決してヴィオラに向ひ、

『これシザリオ、――　では無い、ヴィオラとやら、其方が優しき心底は今合點して、予は面目無く又嬉しく思ふぞ。　それにつけても、今までこの身を主人と呼びし因緣により、誠一代の其

方が主と定めてはくれまいか、公爵夫人と呼ばれてはくれまいか。』

聞いてヴィオラの嬉しさ、先だつものはたゞ涙である。オリギャは進み出で、長の御心もじをつれなく致しましたお詫に、此の御緣談の媒人は何卒自らにお任せ下されまし。後ともいはず今日の中に、さあ〳〵早くと先に立つて一同を廣間に通し、家來を指圖して再び婚禮の用意に取りかゝつた。

朝ある事が晩にあるとは此の事、オリギャの屋敷は又もや上を下への騒ぎ、例の牧師は又も立會の役を頼まれ、新婿オルシノの附添は新婿のセバスチアン、新嫁ヴィオラの附添は新嫁のオリギャ。目出度し〳〵が二つ重り、双生兒が運も同じ日に開くといふも何かの因緣、同じ日に生れ同じ船で暴風雨

に遭ひ、暫く吹き分けられ又同じ日に同じ家で婚禮し妹はイリリヤ國の公爵夫人となり、兄は同じく伯爵の婿君となつて、相生の松の幾久しく並び榮えたとの昔話。めでたし〳〵。

（第十二夜終）

はしがき

シェークスピヤの名は天下に喧傳して、上は王侯より下は稚童走卒まで、これこそ知らぬ人もありますまいから、何もとり立てゝ説明にも及ばぬ次第でありますが、たゞ此の筋書樣の物語が餘りお粗末でございますゆゑ、彼の大詩人を傷けはせぬか、否、誤解の種となりはせぬかと懸念に堪へませぬ。原作は、決して〳〵こゝに紹介したやうな單純な無趣味なものではございません。尤も、通俗といふ頭書の都合から、成るべくはチャールス、ラムの綴りおいた例の物語の流義に從うてくれよといふ出版書肆の需めもありまして、斯樣な書きざまとなりました。こんなものも、彼の大詩人研究の線香ほどな導火とならば大

滿足でございます。

壬寅十二月下旬

代水生

挿繪につきて

一、沙翁肖像――シェークスピヤの肖像は、今日までにどの位出來てゐるかわかりませぬ。或好事家が集めた版本の肖像だけでも、千種あつたと申します。この外油繪彫刻などの分を盡く合せたら大した數でございませう。その中で最も古いのは、沙翁が墳墓の地たるストラトフォルドの寺院に安置してある半身像と、最古の沙翁全集(所謂第一フォリオ版)に掲げてある銅版とであります。これは沙翁の永眠後間も無く出來たものゆゑ、先づ眞に近いとしなければなりませぬ。併し兩者ともに精神理想といふものが缺けてゐて、古今獨歩の大詩聖の肖像どして滿足が出來ぬといふ所から、後世に至つて理想的に沙翁を描かんと試みた美術家が澤山出ました。名優ガーリックの勸めによつて筆を執つた有名なるトーマス、ゲーンスボローを率先者として歷代の名匠が苦心の作も多數ありますが、就中最も名高いのは、チャンドス(「ヤンセン」及び「フェルトン」の三枚であります。中にもチャンドス(畫工の名にあらず)は理想的に最も評判のある作で、大體は英國人といふより寧ろ東洋人(猶太人)の相貌で、威嚴のあ

る額、鋭い眼、縮れた髪、感覺の強さうな唇を持ち且つ耳環を懸けてゐます。これはトーマス、チャージといふ士人が、或若者の顔が自分の理想の沙翁にそつくりだといつて、是れを手本として描かせたのだと申します。この像を一層理想的に描き進めたかと思はれるのは彼のギルバルトの沙翁像で、鋭氣颯爽たる武士的の風采、一見して悲壯劇の作者と受けとられます。この像は先年『早稲田文學』にも出ましたゆゑ、此處にはヤンセン(Jansen or Janssens)のを掲げました。これは顔立ちから服裝まで、彼のフォリオ版の像(所謂"Droeshout Portrait")によく似てゐて、裕やかな襟飾のある天鵝絨の上着を着し、額の廣い、沈着な、溫和な顔であります。所謂「君子シェークスピヤ」の風采がよく表はれてゐて、如何にも人世の悲喜兩面を深視達觀した詩聖らしいといふので、多くの沙翁景慕者を滿足せしめてゐると申します。圖の右の角に56—1610といふ字があつて、56は沙翁の年齢1610は肖像の出來た時だと申しますが如何でありませうか。

二、あら野——ベルリンの畫家カアル、フォン、パッフテンの筆、蘇格蘭の高原は日本で云へば那須野が原以北の曠野の今一層風景の偉大な處だと申します。土

地黄ばんで草綠に且つ水蒸氣の美しきを以て美術家に稱せられてゐます。折しも日影西山に落ちて滿天暫く金色に輝きわたると見るまに灰色の幔幕曠野の四方を被はんとしかけてゐるところ、マクベスが妖婆に誘惑せられて大望を起すに至る恰好の舞臺として、劇にも畫にも屢々用ひられてゐる景であります。『マクベス』の挿繪には、これと共に末段のマクベス夫人夢行(スリープワオーキング)の圖がよく畫かれるのでありますが、右の筋はこの物語に省きましたゆゑ掲げることが出來ませんでした。

三、亡靈——筆者は有名なるサア、チヨン、ギルバルト(1817—1897)であります。ギルバルトは英國水彩畫會の會長で、油繪、ペン畫などにも妙を得、故實に精通して歴史畫に得意でありました。氏が英國の歴史畫は編者も寫眞で二三十枚は見ましたが、「リチャード二世の禪位」「エドワード三世」などを始め、何れも結構壯大、筆力勁拔なもので、これ程の大作がどうして水彩畫で描けたかと或る畫家と共に驚きました。氏が大小數百の挿繪を加へて出版した沙翁全集("Gilberte Sharlhespeare")はペン畫ながら非凡の名作で、悲壯と滑稽との二面は十二分に成

功してゐるといふ衆評であります。たゞ優美といふ點だけ稍物足らぬ樣ではありますが、兎に角氏が傑作の一と傳記家も申してをりまして、挿繪附沙翁全集中の白眉と思はれます。

四、昔がたり――同氏の筆。氏が挿繪の唯一の缺點と或批評家のいふ所によれば、沙翁の女性が何れも似て了つて、デュリエットもロザリンドもデスデモナもこゝに掲げたミランダも皆同じ性格のやうになつてゐるといふ所であります。尤も同じ樣な若女の性格を際どいところで一々畫きわけるのはなかなか困難なことで、(日本畫では小野小町も紫式部も淀君も同じ容貌なるに！)これに成功したのは、次に掲ぐるレイトンなど數人に過ぎぬと申します。

五、離れ小島――筆者ゴルドン、ブラウン氏のことは寡聞にしてよく存じませぬが、この繪は、英國現代の名優ヘンリー、アーヴィングが舞臺にかける沙翁劇の本文として刊行した全集の挿繪であります。件の全集(十冊)は本文の外に、劇の道より觀たる各篇の委しい解說や諸專門家がものした有益なる考證註釋などが添へてあつて、頗る興味深い考であります。挿繪は右ブラウン氏の外六

七名の分擔でいづれもアーヴィングの舞臺に據つて出來てをります。前記のギルバルトと共に、この繪は坪內先生の藏書から撮影しました。尙ほ專門家の見るべき有益な繪は數多ありましたが、この編が筋書ゆゑ手近なところに止めました。

六、戀の歌――同上。

七、春園――同上。

八、ヴイオラ――先年ロンドンの或美術雜誌で、沙翁全集の二十一人の女主人公を現代の諸名家に囑して揮毫させましたが、その中で成功したのは數枚に過ぎなかつたと申します。こゝに掲げた「ヴイオラ」は「デスデモナ」「ヘレン」などと共にレイトン氏の當時の名畫の作であります。但し寫實的考證的ヴイオラ(上代メッサリヤの女性)といふよりは、寧ろ現代の英國理想的少女だといふことであります。

以上八枚の中、「沙翁の像」、「あら野」及び「ヴイオラ」の三枚は、寫眞の網版から網版に重寫した爲め、遺憾ながら大いに趣きを減じました。

6/11/36

坪内文學博士校閲
青年諸名家執筆

少年世界文學

全部五十冊定價各十二錢郵税各四錢

既刊目次

第一編 ふしぎの魚
第二編 狐太郎
第三編 神代のはなし
第四編 はちかつぎ姫
第五篇 イソップのはなし
第六編 六勇士
第七編 はまぐりの草紙
第八編 梅王松王櫻丸
第九編 葛の葉姫
（以下續刊）

東京合資會社富山房

明治三十六年三月八日印刷
明治三十六年三月十日發行

沙糖物語奥付
定價金貳拾錢

著者 杉谷代水
東京市神田區裏神保町九番地
發行者 合資會社 富山房
同所合資會社富山房社長
代表者 坂本嘉治馬
印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 森潤二
印刷所 株式會社 秀英舍第一工場
發兌元 合資會社 富山房
（電話本局一〇三六）

複製不許

坪内文學博士校閲○青年諸名家執筆

通俗世界文學

全部五十冊　金壹圓四拾錢
六錢　五錢
廿五錢　金壹圓四拾錢

毎冊定價四拾六錢　金二十錢　全部金貳拾五錢
郵稅貳錢　金貳十錢　金貳拾五錢
郵稅四錢　金貳十錢　金貳拾五錢
郵稅廿貳錢　金九錢

目次

第一編　ミルトン失樂園物語　繁野天來編：ドール原畫縮寫數葉挿入
第二編　沙翁物語　マクベス外二編：杉谷代水編：英國略大家原畫七葉挿入　二月發行
第三編　ホオイリアッド物語：正宗白鳥編：英國略大家原畫數葉挿入　三月發行
第四編　沙翁物語　ハムレット外二編：中島孤島編：英佛諸大家原畫數葉挿入　四月發行

以下陸續發刊

「通俗世界文學」の特色

一、我が「通俗世界文學」は、曾く現代の青年乃至中年者を通じて、國民一般の理想的讀物たらしめんとの目的を以て發行したるもの也。即ち「少年世界文學」の一層程度の高きもの也。

二、我が「通俗世界文學」は、全篇坪内文學博士の監督の下に、世界文學の古今の傑作を殷密なる標準によりて選擇し、而して現時青年の諸名家が最も苦心經營の餘、極めて通俗に極めて親切に紹介したるもの也。且つ博士は、本書の圖藝内容につきても亦叮嚀校閲添削を施されたれば、一字一句悉く皆彫金鏤玉の文字也。

三、我が「通俗世界文學」は、單に世界文學の梗概を紹介するを以て足れりとせず、併せてその血肉ある原作の全影を例へばラムのシエークスピアに於けるが如く最も巧みに縮寫したるもの也。是故に、かの浩瀚なる原作を通讀するの暇なき者か、若しくは難解なる原作を翫味するの力なき者と雖も、本書によりてさながら其の原作に接するが如き妙趣と感興とを享受するを得べし。

四、隨つて「我が通俗世界文學」は、文學に志ある青年諸君が、世界文學研究の階梯となるべきのみならず、一般國民の愛翫書となりては、その氣格を高雅にし、その情操を優美にするの効あるべし。

之れを要するに、我が「通俗世界文學」が、現時青年以上一般國民の愛翫書として所謂趣味教育の上に偉効を奏するを得ば、曾に教育の幸榮のみにあらざる也。

31

41
109

41
109

101014-000-0

41-109

沙翁物語

杉谷　代水／編

M36

DBY-0296